

九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学

生涯学習研究センター紀要

第14号

目次

■研究論文■

●九州女子大学●

- 三島茶碗の探求—その分類と特徴 …………… 阿部 誠文 …… 1
- 忘れられた共同体的感覚 …………… 馬場 雅典 …… 15
- 憲法解釈において論争されている理論の概要 …………… ダタール ニティン …… 29

■研究報告■

- 健康教育のカリキュラム開発に関する基礎的研究 …………… 木内 隆生 …… 47
 —健康教育の原理と歴史、現状分析を中心として—
 大庭 茂美
 角田 智恵美

2009年

三島茶碗の探求——その分類と特徴

阿部 誠文

九州女子大学人間科学部人間文化学科教授

キーワード：高麗茶碗

An Inquiry of Mishima Tea bowl — A Lifelong Study

Masafumi ABE

Professor, Department of Humanities, Faculty of Humanities,
Kyushu Women's University

ABSTRACT

Study of china and porcelain is a lifework research. This is due to the deepness in parts of the scientific and artistic research. This is an examination of the relationship of Japan and Korea concerning an inquiry of Mishima tea bowl and to express my opinions in regards to the research subject.

KEY WORD : Korean Ceramic

I. 序論

1. 三島の範囲

日本で三島茶碗と称している器は、朝鮮のいわゆる粉青沙器にあたる。これを磁器を沙器というは正しくない、という尹竜二の説を襲って「朝鮮陶磁器の分類Ⅱ 粉青磁」で、粉青磁もしくは、粉粧磁という呼称を提示した⁽¹⁾。三島とよばれる陶磁器の特長は、圧倒的に粉粧にある。粉粧とは、水に溶かしたカオリンを刷毛で塗ったり、象嵌したり、カオリンに浸したりする技法である。しかし、粉青磁の初期は、象嵌を主体とし、釉薬も青味を帯びた釉薬を使っている、青磁と区別が付きにくい。これらを、俗に三島青磁と呼んでいる。しかし、胎土は、灰青色や灰褐色を帯びていて、釉薬も透明ではなく、一目で粉青磁と区別できるものもある。どちらも象嵌であることに変わりはない。そこで、私は象嵌のみの器を粉青磁と呼び、粉粧主体の器を粉粧磁⁽²⁾と呼ぶことにした。近年、象嵌も粉粧もなく、釉薬・胎土が三島と同じものも「三島」と呼称している。無地三島と呼ぶべきか。

以上を三島茶碗の範囲と考えたい。しかし、かならずしも、はっきりと区別し難いところがある。1つは、象嵌青磁と初期の象嵌粉青磁である。もう1つは、白磁化した、最末期の粉引である。象嵌青磁と象嵌粉青磁は、胎土、青磁の色と作行きによって区別するほかはない。最末期の粉引には、雨漏と称されている茶碗や白磁と称されている茶碗も含まれる。いわゆる白磁茶碗との違いは、粉粧されているかどうかである。白磁は胎土と釉薬との二層であって、粉粧磁は、胎土・粉粧・釉薬の三層になる。

そして、白磁よりやわらかい黄味を帯びた白色であって、色調からも区別することができる場合もある。

2. 三島の呼称

次に、「三島」の呼称について述べておきたい。

「みしま」と記されているのは、『天王寺屋会記』の永禄8年(1565)年が初出で、次に『天王寺屋会記』の天正2年(1574)に「こゆみ茶碗」の記載があり、三島茶碗の一種の暦手茶碗と考えられている。諸説をまとめると、次のようになる。

(1)静岡県三島市の三島大社で発行されていた(応仁・文明期<1467~87>)暦の文字に、象嵌の文様が似ているので、この名がついた、という説。この説は、三島暦が発行されなくなってから、78年後のことになる。三島暦というものも、実に雑多で、一様ではない。そのなかに、似ているとみれば、似ている模様がなわけではない。

しかし、いわゆる三島茶碗の象嵌の文様もさまざまであり、これまた一様ではない。

つまり、三島暦と象嵌粉青磁のなかから、それぞれ都合のよいものを取り出しての呼称となる。根拠とされる文献は、『寛永手鑑』で、「惣じて三島手というは、茶碗の表に三島暦を見る如くに、堅なる細き絵あり、依って又是を暦手ともいうなり」とあ

り、『茶道正伝集』にも「茶碗に昔時伊豆三島より出せる三島曆に似たる文様あるを以て之を三島といひ、また曆手とも云ふ」とあることによる。ともに後のもので、「三島」「こゆみ茶碗」の呼称が出る前のものではない。したがって「みしま」が、三島曆をさすかどうか、定かではない。

(2)地名説

- ①茶道の宗匠三谷宗鎮が享保13（1728）年に刊行した『和漢茶志』に、「なかんずく世の好むところは三島なり。また、これ地名をもつてす」（書き下し阿部）とある。しかし、地名が、どこか、わからない。「みしま」の初出の永禄8年から163年も後である。
- ②『高麗図経』に、壹岐、対馬、五島を総称して三島と呼んだ記録があるので、この三島を経由して招来された、という説。しかし、対馬・壹岐はよいとして、なぜ五島を経由して、遠まわりをしなければならないか説明がつかない。五島は誤りで博多をさすという補強説も出た。それに、その経路たどったのが、すべて「みしま」と呼ばれているわけではない。
- ③中国の宋代に朝鮮の東南海岸地区（全羅南道・慶尚南道）を三島と呼んだということが『高麗図経』にあり、この地方から招来されたため、という説。
- ④浅川伯教がとなえた巨文島説。巨文島は三つの島からなり、貿易の基地であったので、三島と呼ぶようになった、という説。これは、3)の地域を巨文島に狭く限定したものである。この説について、林屋晴三は、「典拠を何によったかわからない⁹⁾」という。巨文島は、麗水の南海上はるかにある島で、とても貿易の基地であったとは思われない。陶磁器の生産地からも遠い。
- ⑤泗川・三千浦説
私が泗川市、三千浦を訪ねたとき、土地の人が、三千浦は陶磁器の積み出し港であり、陸からは靉島（ヌクド）草養島（チョヤンド）が見える。靉島は、二つの島に見えるので、二つの島を合わせて三島といった、という。現在は、靉島と草養島には靉島大橋（340m）が架かり、泗川市大芳洞から車で行くことができる。巨文島説よりは有力なのは、三千浦、泗川、晋州、山淸、河東など陶磁器の生産地に囲まれており、実際に三島を含む積み出し港であったことである。その三島が、なぜ「こゆみ」（曆の古語）と結びついたのかは、さだかではない。江戸時代の記録からすれば、やはり、「三島」から「三島曆」を連想し、似た模様があることから、曆手と称したのか、と思われる。
- ⑥「三島」とは、古い朝鮮の呼称で、室町時代には、朝鮮の別名として通用していたので、朝鮮からの招来品なので言ったとする是沢恭之の説。それならば、他の茶碗も三島と呼称してもよいはずだが、そうはなっていない。それは、その後さまざまな茶碗が招来されたので、三島手に限って呼ぶようになったという。

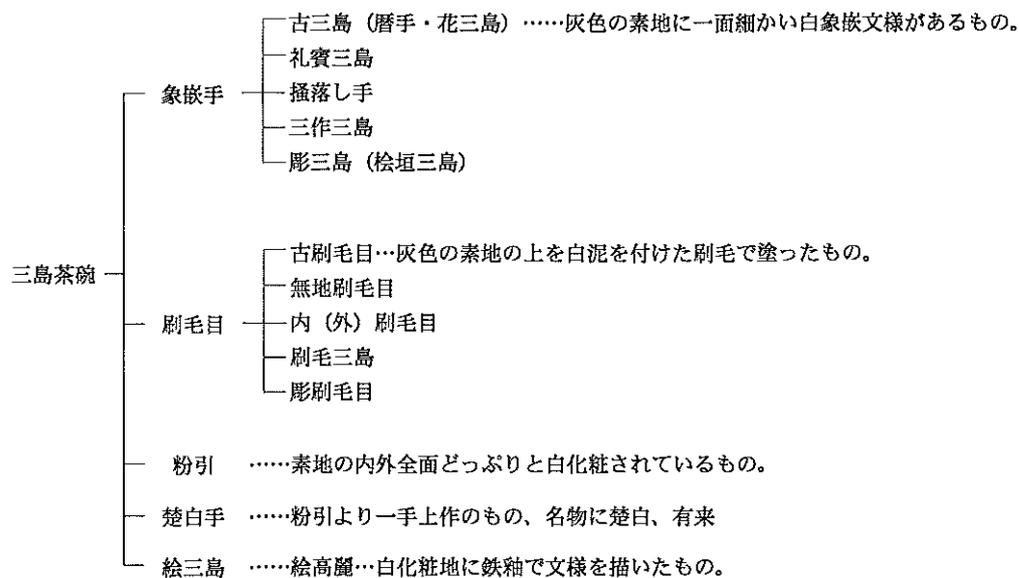
(3) 朝鮮官窯説は、沙器所などで作らせ、官庁名を入れた器を納入させ、それを三島(朝鮮名)で呼ばせた、という。この説には、根拠がない。尹竜二は、『韓国陶磁史の研究』で、『太宗実録』太宗17年から、全国の陶器所では、陶磁器が土産貢物として取納されたことを示し、「官営であったとすれば、貢物では、あり得ない」⁽⁴⁾とする。官が作った品を官に貢物とすることは、たしかにあり得ない。

以上、諸説をあげたが、どれも確たるものはない。「三島曆説」が有力視されているが、それも曆手に限る。また、壱岐、対馬、五島を三島といった、というのも採りがたい。私は、『和漢茶誌』の記事や『高麗図経』の宋代の地名、などから地名説をあげたい。もし、その地名を朝鮮の古名や朝鮮南部の海岸地方などではなく、特定の地域とするならば、泗川・三千浦説を新たにあげておきたい。

II. 三島茶碗の分類(通説)

次に、分類について若干を述べておくことにする。

一般的には、礼賓三島、古三島、二作三島、三作三島、刷毛目、無地刷毛目、粉引と分類している。このなかに狂言袴などは雲鶴茶碗と同じく青磁とみなしているためか、三島には含めない。また、彫三島は、17世紀以降、織部意匠の1つとして日本からの注文によって作られた茶碗で、三島ではあるけれども、17世紀以降の注作品の茶碗の中に分類する。もっとも、常石英明は、彫三島として、三島茶碗の中に分類している。その常石英明の分類⁽⁵⁾が、やや詳しいので、参考にあげておきたい。



茶の湯で、つちかわれ、伝世品によって分類すると、以上のようになる。

III. 粉青磁と粉粧磁の編年

日本で三島と呼ばれている陶磁器は、粉青磁と粉粧磁に分けられる。粉青磁の時期を前期とし、粉粧磁の時期を後期とし、技法を中心として、編年資料によって分類すると次のようになる。年数を明示したが、おおよその目安であり、始まりは10年位さかのぼり、終わりは10年位は延長することも考えられる。むろん、新たな編年資料が出れば、その都度、訂正されなければならない。

前期 象嵌粉青磁と印花粉青磁

第1期 (1392～1470年) 象嵌粉青磁と印花粉青磁の時期

編年資料

1404年没	崔雲海墓出土粉青磁象嵌波濤文鉢
1417～20年作	粉青磁印花菊花文「敬承府」銘皿
〃	粉青磁印花菊花文「恭安府」銘鉢
1420年下限	粉青磁象嵌菊花文「恭安府」銘鉢
1424年没	貞昭公主墓出土青磁象嵌草花文四耳壺
〃	貞昭公主墓出土粉青磁印花集團連圈文四耳壺
1435年比定	粉青磁象嵌「宣徳10年」銘墓誌
1437年	粉青磁印花「昆南長興庫」銘皿
1438年	粉青磁印花菊花文「長興庫」銘鉢（「正統3年」銘墓誌一括）
1440年	粉青磁象嵌「正統5年」銘盤形墓誌
1449年	粉青磁象嵌「正統14年」銘円筒形墓誌
1450年	粉青磁象嵌「景泰元年」銘墓誌
1450年	銘青磁象嵌「曹沆之墓」銘墓誌
1454～1462年作	粉青磁印花菊花文「月山君」胎壺（胎誌）

以上、1404年以前のものであると思われる最初の編年資料から1462年までのものと思われる粉青磁の編年資料は、すべて象嵌技法と印花技法によるものである。よって、少し幅をもたせて朝鮮時代の始まりである1392年から1470年までの約78年間を一期とする。むろん、この間に、文様・器形・釉薬や胎土の変化もあろうから、さらに細分化できよう。たとえ、そうであっても、象嵌技法と印花技法による粉青磁の時期といえる。なお、象嵌技法と印花技法による粉青磁は遅くとも1490年代には消滅したと考えられているので、この後十数年の命脈であった、ということになる。

後期 粉粧磁

第1期 (1470～1485年) 線刻粉粧磁と掻き落とし粉粧磁出現の時期

わずか15年間という短い期間であるけれども、刷毛で白化粧したうえに線刻もしく

はそれを掻き落すという新しい技法が現れたので区分する。編年資料は、今のところ、次の2点のみ。

1477年 粉青磁線刻草文方形墓誌（釜山市立博物館蔵）

1481年 粉青磁線刻草文方形墓誌（淑明女子大学博物館蔵）

掻き落しは、全羅南道中心という地方色のあるものであり、他の地方では、なお象嵌粉青磁や印花粉青磁が作られたことは想像に難くない。線刻や掻き落しによる粉粧磁も1500年代初めまでは作られたと思われるが、編年資料がない。制作された期間は40年から50年位と考えられる。

第2期（1470～1500）印花刷毛目の時期

器面に印花で文様を記しながら、刷毛で白泥（カオリン）を塗ったもの。白泥を拭き取って象嵌しないものである。編年資料はあげないが、印花象嵌の末期から、刷毛目に至る過程の作と考えられるので、印花象嵌の終わりの年代と刷毛目の初めの年代を記した。

第3期（1485～1500年）鉄絵粉粧磁の時期

刷毛で白化粧した上に鉄釉で絵を描くという新しい技法が出現したので区分する。鉄絵粉粧磁は鶏竜山地方で作られた。編年資料は、以下の3点のみ。

1487年 粉青磁鉄絵「成化23年」銘墓誌

1490年 粉青磁鉄絵「弘治3年」銘墓誌

1536年 粉青磁刷毛鉄絵「嘉靖15年」銘墓誌

鉄絵を施した編年資料の最終は、その前の資料とは46年離れている。しかし、鉄絵の技法が用いられているということで、鉄絵技法の粉粧磁は1540年代まで作られたと想像できる。一応の目安として1485年から1500年までの15年間としたが、15年間に限って作られた、ということではない。

第4期（1500～1540年）刷毛目粉粧磁の時期

粉青磁は、官用から民間用になって自由な表現技法を生んだ。それによって、刷毛目の美しさを発見し、刷毛目の粉粧磁を出現させた。単なる簡略化ではなく、新たな技法の発現として区分する。編年資料は、以下の1点のみ。

1501年 粉青磁刷毛「弘治14年」銘墓誌

刷毛目粉粧磁は、物原の層によって1550年代まで、僅かながらも命脈を保ったのがわかる。

第5期（1540～1570年）粉粧粉粧磁の時期

刷毛目粉粧磁に、器の全体もしくは半分を刷毛でていねいに塗りつぶしたものがあ

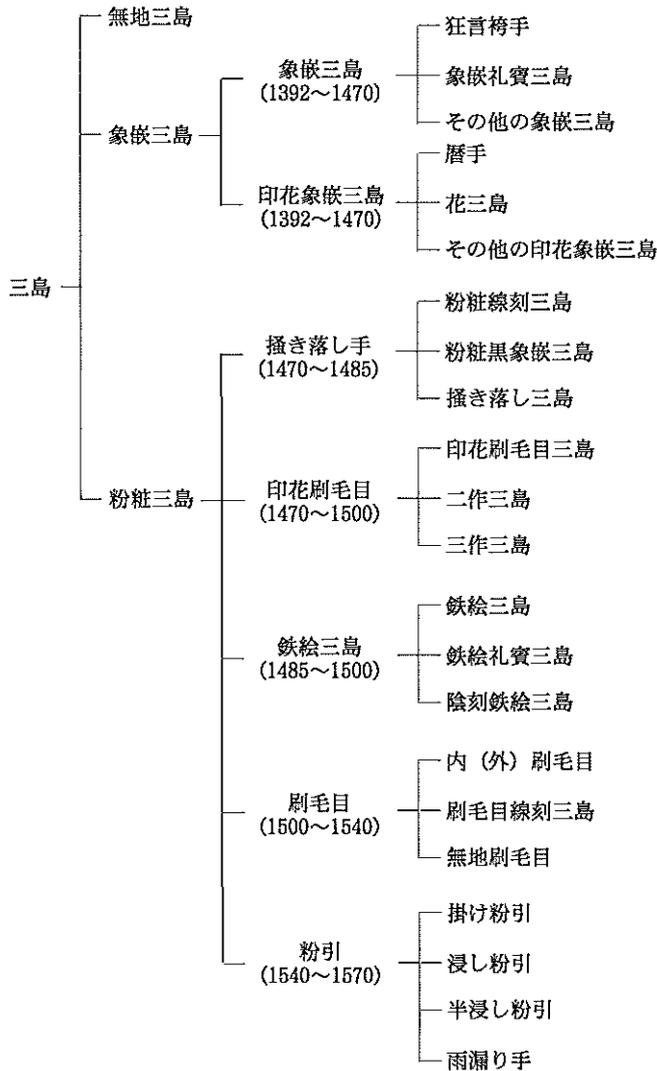
り、塗りつぶした刷毛のあとがある。それが、さらに、簡略化して刷毛を用いることもやめ、器に子杓で水容カオリンを掛けるか、あるいは直接浸す技法が現れた。掛け技法、浸し技法と呼ばれる技法で、そこに柔らかさ、暖かな白を発見したと考える。白磁の代用として得た技法と言われるが白磁をめざしたのは末期である。新しい美の発見として区分する。編年資料は、以下の1点のみ。

1540年 粉青磁粉粧「嘉靖19年」銘墓誌

1540年を始めとしたのは、編年資料上、刷毛目と粉粧粉青磁との橋渡しになる年だからであって、すでに述べたように刷毛目は1550年代まで作られた形跡がある。また粉粧粉粧磁の制作開始は、もう少し早い時期であろうことも考えられる。終わりを1570年としたのは、粉粧粉粧磁は1550年代には、まれにしか作られず、白磁に近い粉粧粉粧磁が作られたと考えるからである。全羅南道高興郡豆原面雲袋里^{ウンデリ}の粉粧磁窯は、およそ30年間用いられたと聞かし、粗質白磁である井戸茶碗が日本で初めて文献に登場するのは『山上宗二記』（1589年）で、それ以前に白磁にとって替わられたとすれば、1570年代と考えるのも無理ではないであろうと考えた。雲袋里の粉引を通称として宝城粉引というが、雲袋里近くの宝城の窯は二基しかなく、生産量も少なかったようである。

IV. 阿部誠文による三島茶碗の分類（試案）

そこで、朝鮮陶磁史、なかでも粉青磁と粉粧磁の視点と、発掘品まで含めた茶碗をも加えて分類すると次のようになる。



以上の分類は、出土品の編年資料に従い、その年代順に配列し、分類したものである。およそ15世紀前半（1392~1470）は、象嵌三島と印花による象嵌三島が作られた時期である。象嵌三島は、手彫りによる象嵌であり、印花は、花や雨滴文などの印を作って、押し窪めてする象嵌である。従って、印花が、象嵌技法が衰えて生まれた、というわけではない。文様には、主文様と従属文様とがある。両方手彫り象嵌の場合もあ

るけれども、主文様が手彫りの象嵌で、従属文様が印花の場合もある。印花象嵌も同様で、すべてが印花象嵌の場合もあるが、主文様だけを印花象嵌を用い、従属文様は手彫り象嵌をしたものもある。これは、何を意味するかというと、印花は、単に簡略化をめざしたものではなく、簡略化と同時に、美的効果を考え、印花と手彫りとを加えて用いたものと考えられる。

象嵌三島には、狂言袴に分類されている「曳木鞘」「藤袴」「ひき木」「雲鶴」がこれにあたる。なお、礼賓三島は、礼賓寺、内贍寺、内資寺、仁寿府（三加とも）、長興庫、司（司膳置の略号）、局（内局の略号）、公（公州の略号）、黄（黄州の略号）、内用（内資寺の内用の意）など、役所や産地を象嵌したものをいう。初期は手彫象嵌であったが、のちに印花象嵌になったものもあるが、分けずに、象嵌ということで、ここにあげた。

印花象嵌の茶碗には、「三島桶」などがある。そして、粉青磁が、三島の前半を占る。図では、「三島が製作されたのは、178年間であるが、そのうちの78年間は、もっとも期間が長い。しかも、これは概数であるから、8～90年作られたとみてよい。

そして、後半期の初めに掻き落とし手が出てくる。これは、粉粧したあとに線描し、（たとえば牡丹文であれば、花と葉の部分を残して）粉粧を削り取ったものである。これを掻き落とし三島と呼んでいる。しかし、粉粧をし、線刻をしたままの茶碗もある。すなわち、掻き落としをする前の段階の茶碗である。粉引線刻または陰刻というべき茶碗であるが、編年資料でみる限り、掻き落としの末期と粉引きの初期と比べても55年も早いのである。したがって、粉引に分類せずに掻き落としに分類した。また、線刻の上に鳥文や草文を黒で象嵌した茶碗もある。これも、掻き落とし前の線刻に象嵌したものととして、掻き落としに分類した。

この掻き落としは、1470～1485年くらいまで全羅南道北部とそれに隣接する全羅北道南部の一部で作られた。場所も期間も限定された地方色豊かな茶碗である。線刻・象嵌・掻き落としという表面の文様を別にすれば、高台まで刷毛でくまなく粉粧が施されていて、まさに粉引で、線刻粉引、象嵌粉引といってよい茶碗である。しかし、年代、産地を考えて、掻き落としの発展過程で生まれた茶碗と考えたい。釉色も黄味がかかった乳白色で、やわらかい感じがする。私自身も、初めは、掻き落とされたものだけを掻き落としとし、線刻や象嵌は、55年ほどあとの粉引と考えていたのであった。線刻や象嵌を施す前に、器は全体を粉引のように粉粧するとは、思いもおよばなかったのである。なぜならば、粉引は、象嵌→刷毛目→粉引の順に作られた、と考えられていたからである。

掻き落としが一地方的なものだとすれば（といっても、象嵌から一気に全面粉粧に至った意義は大きい）三島茶碗の流れは、粉青磁から粉粧磁への流れをたどった。三島刷毛目というのがそれである。これは、象嵌すべく陰刻した文様を象嵌すべく刷毛で白泥（カオリン）を塗るのであるが、それを拭き取らず（拭き取れば陰刻したところに

白泥が残って白象嵌となる) 刷毛目の下に陰刻が見えるのを美的な景観としたものである。また、内側をこのように作り、外側を刷毛目だけにしたものも少くない。これを、山田万吉郎は、『三島刷毛目⁽⁶⁾』と呼んでいる。三島文様の上に刷毛で粉粧を施した器の意で、茶碗の分類のうちの三島のなかの刷毛目茶碗という意ではない。まぎれやすいので、私は、印花刷毛目と呼ぶことにする。なお、山田万吉郎は、同書で、務安の刷毛目と花三島は混和することはなかったけれど、務安の北の霊光郡に至ると混和を始め、鶏竜山では、内面花模様、外面刷毛目と混和したのがみられる、という。つまり、務安地方(これは、搔き落しの全羅南道北部と同じ地域)から北上し、鶏竜山に近づくに従って混和をしたと考えている。

三島刷毛目に属する茶碗には、「両国」(内三島刷毛目、外粉引風)、「二徳三島」(内三島刷毛目、外粉引風・刷毛目)、「上田曆手」(内外ともに三島刷毛目)、「亭」(内三島刷毛目、外刷毛目)、「漣波」(亭と同様)、「平瀬家伝来」「みしま」(同様)、「白雲」(同様)、「三作三島」(同様)があげられる。以上あげた「みしま」までは、刷毛で白く塗りつぶすように塗り、「白雲」、「三作三島」は、刷毛の味を生かしている。「二徳三島」から「白雲」までは、胎土、釉色、作行などから鶏竜山窯の作と認められる。

鉄絵三島は、刷毛で粉粧を施した上に鉄の釉薬で草花文などを書いたもの。すべて鶏竜山の窯で作られている。ここに、礼賓寺三島といわれる茶碗には、象嵌の礼賓寺と、鶏竜山で焼かれた鉄絵の礼賓寺がある。年代も産地も技法も違うので、鉄絵礼賓寺三島として、ここに分類した。重要文化財の「四皓」徳川美術館蔵の三島大平茶碗は、これにあたる。陰刻鉄絵三島というのは、粉粧を施して陰刻し、その上に鉄釉で象嵌したもので、私は1点しか見たことがない。いずれにしても、鉄絵三島は、すべて鶏竜山窯の作で、場所が限定された地方性のあるもので、粉粧は刷毛で行われている。

刷毛目は、刷毛目をあらわに印した茶碗で、内外ともに刷毛目があるもの、外側だけにあるもの、内側だけにあるものに分けることも可能である。刷毛目線刻三島は、刷毛で刷毛目をあらわに粉粧したあとに、線刻で、葉や草花を書いたものをいう。これは、搔き落とし手の粉粧線刻三島に似ているようであるけれども、粉粧線刻三島は、刷毛は用いているけれども粉引のように、くまなく塗りつぶしている点が違うのと、産地と年代とが違うので分類する。さらに、無地刷毛目というのは、器のなかばほどを刷毛で、刷毛目が見えないように白泥を塗ったものをいう。ここまで、刷毛で粉粧を施す方法をとっている。世にいう、無地刷毛目という茶碗や鉢類のほとんどは、白泥に器の上部半分を浸して粉粧したものをいう。しかし、これは、技法が違うし、粉粧磁の最末期にあたるので、区別すべきであるので、半浸し粉引⁽⁷⁾ということにしたい。韓国では、粉引をタンボン(白泥につけるときの擬音語という)といい、世に無地刷毛目を半タンボンという。タンボンもパンタンボンも、ともに浸し技法で刷毛は使わない。どう区別するかというと、無地刷毛目は、いかに塗りつぶしているとしても、

よく見ると刷毛のあとがある。筋のようであったり、油絵のタッチのように。半浸し粉引は、刷毛目がなく、また、白泥が下部に垂れて釉垂れが起きる。もちろん、状態によって区別のできないものもある。

粉引になって、初めて刷毛を使わない粉粧となる。それも、少くとも三段階ある。第一段階は、柄杓で白泥をかけた。柄杓手とっていいかもしれない。一応掛け粉引⁶⁾と呼ぶことにする。これに分類されるのは、「三好」、「松平」、「楚白」、「津田」、「稻荷山」が入る。第二段階は、浸し粉引で浸し粉引⁶⁾で、団家伝来の粉引、その他がある。発掘品には、この手がかもっとも多い。浸し技法で茶碗の半分を粉粧したものを半浸し粉引とよぶ。世にいう無地刷毛目には、この類の茶碗が多く入っている。徳川家伝来の無地刷毛目、高橋箒庵伝来の無地刷毛目もこれに入る。ここで付け加えておきたいのは、この半浸し方を用いた粉引茶碗があることである。どういうことかということ、まず器の下半分を浸し、高台を手にとって上半分を白泥に浸すという方法である。この方法だと、上段と下段の境目に、白泥の掛からなかったところや、白泥が二重になっているところがあるので、それと知られる。第三段階は、雨漏手である。もともと粉引は、雨漏模様がつきやすい。ピンホールや貫入から茶が沁み入ってできるのである。伝世品では、「稻荷山」、井上家伝来の粉引など、雨漏模様が、いちじるしい。雨漏手とは、こうした器についていうのではなく、粉粧の最末期に白磁をめざして、均一に粉粧を施し、釉薬は透明で、焼きが硬いものをいう。それでも、ピンホールや貫入から茶が染みこんで、雨漏模様ができる。一見白磁と区別できないものもあり、白磁や堅手に分類されていることが多い。白磁かどうかは、粉粧されているかどうか、による。粉粧されていれば、雨漏手粉引とみる。畳付きや釉剥げなどで土見せになっている釉薬のかかり方のわかる所で二層になっているか、三層になっているかで判断する。白磁よりは、やわらかい美しさがあり、肌も、クリーム色を帯びているのがこの特長である。根津美術館蔵の重要文化財の「雨漏」や同美術館所蔵の「蓑虫」、三井家の「翁」などは、この手に分類されるのでは、あるまいか。

V. 結論——三島茶碗とは

三島茶碗とは、朝鮮の14世紀末から15世紀後半に作られた粉青磁と15世紀後半から16世紀後半までに作られた粉粧磁の総称である。編年資料による分類と特徴にあげたように、技法的に見れば一見簡略化の方向に進んでいる。しかし、それは、たんに、簡略化を求めただけではない。粉青磁は、象嵌と印花と同時に用いられていて、象嵌が簡略化されて印花になったとはいえない。たんに簡略化を求めたのなら、象嵌のあとの年代に印花が来てもよいはずだが、そうはなっていない。一つの器で印花を主文様としながら、手彫り象嵌を用いているものが少なくない。これは、二つの技法を用いることによって、その美的効果を考へてのことである。

粉粧磁は、15世紀後半の中ばになって突然出現する。全羅南道北部と全羅北道南部の一部に限られるが、これは、驚くべきことである。器に刷毛で白泥（カオリン）をていねいに塗り、線刻を施して、背景にあたる部分を削り取るという技法である。それまでは陰刻や印花などを施してから粉粧し、粉粧を拭き取っていたのが、いきなり粉粧なのである。器をていねいに白泥で塗りこめた結果は、まるで粉引にそっくりなのである。しかし、粉引というべき器を私は、まだ発見できていない。粉引は、白磁を意識して作られたのであるが、この時期（1470～1485）は、まだ、白磁をめざすことはなかった。技法の初期段階としてあっても不思議ではない。どのような器かというところ、一見粉引に見えるけれども、よく見ると刷毛の跡がある器である。それで思い出したのは、茶碗ではなく瓶であった。それは、胴から腰にかけて太くなって安定感がある、いわゆる李朝初期の形に比べると、胴から腰にかけては、細長く、高台も小さく高いものであった。これは、祭器の特長である。白泥の塗り方には、手で塗る場合と、轆轤ろくろを使って均一に塗ろうとしたものがある。それは、刷毛跡を見ればわかる。

そうして粉粧した器に線刻を加える。粉引で線刻の器は、この掻き落とし手の技法の掻き落とす前の技法であるから、この地方の、この時期の器ではないか、と考えている。白磁をめざした粉引は、浸し技法という、もっとも簡略化された技法で、さらに線刻で装飾をほどこすのは考えにくいからである。そして、線刻があれば、黒泥または、鉄釉で象嵌するのは考えられることである。15世紀には、白磁に線刻を施した器（茶碗・瓶など）がある。粉粧線刻に象嵌することは考えられるけれど16世紀中～後半の粉引は、それと年代が違ふし、線刻というさらなる装飾が不必要ならば、線刻象嵌もないはずである。従って、私は、やはり、この時期の、この地方のものとする。しかし、釉調や素地に差異のあるものがあるのが、若干気になるが、窯違い、焼成温度が違えば、おのずと違いが出てくるが、その範囲のものかは、数多く見ないと決定的なことは言えない。そして、掻き落としという、最終段階の技法ができる。牡丹なら牡丹の葉脈や花びらの線刻が残る。その線刻に象嵌した器があってもよさそうだが、それは、まだ見ていない。掻き落した部分などに鉄彩をほどこした器は、韓国中央博物館蔵の平瓶などに見られる。

印花刷毛目は、粉粧技法の流れとしては、自然な流れである。象嵌三島や印花三島は、象嵌や印花を施した上に刷毛で白泥を塗り、拭き取ると陰刻したところに白泥が残って象嵌される。だから、もともと刷毛で白泥を塗っていたのである。それを、拭き取らなくなったのが印花刷毛目である。これも、たんなる簡略化ではなく、拭き取らない美しさや情趣を感受したからにちがいない。そして、内側を印花刷毛目、外側を刷毛目として組み合わせることによって今までにない茶碗を作り出した。これが二作三島であり、さらに、刷毛で主に口縁を塗りつぶしたのが三作三島である。（呼び継ぎを三作三島とするものもあるがこれは、三作三島に加えない。）なかには、内側を印花三島、外側を粉引風に仕上げた「両国」もある。いずれにしても、印花三島は、象

嵌・印花技法の延長で、素地に印花を施した上から粉粧をする。その点、掻き落とし手は、素地に粉粧を施し、その上に陰刻、もしくは象嵌をするので、順序は、まったく違うのである。

鉄絵三島は、鶏竜山一帯の窯で焼かれた。素地に刷毛で粉粧を施し、鉄絵を描いた。絵のかわりに、官庁の名を書いたのが礼賓三島で、技法的には、同じ範疇に入る。陰刻鉄絵は、私は一点しか見たことがない。それも茶碗ではなく瓶であった。まるで丸鑿で彫ったように太い彫りを、太い筆に鉄釉をつけてなぞったように、しかも、はみ出たりしてもかまわないように自由に書いている。

そこで、私が考えるのは、掻き落とし手と鉄絵三島は、密接な関係があるのではないかと思われる。まず1つは、製作年代に連続性があること。ともに地方性があること。ともに、素地に粉粧を施してから、装飾をしていること。掻き落とし手にも鉄彩があり、鶏竜山では、鉄絵になったのではないかと考えられること。掻き落とし手には、線刻象嵌があるが、鶏竜山にも線刻鉄絵があること。掻き落とし手は、務安・扶安地方以北の限られた地域で作られたけれど、その技法などが北上して、鶏竜山に影響を及ぼしたと考えられること（ことに陰刻刷毛目は、務安・扶安地方の刷毛目と鶏竜山地方の印花とが影響してできたとされる）。務安・扶安地方では掻き落としであったけれど、鶏竜山では、鉄絵となった、と考えれば、それぞれが特異なもの、それぞれの地域に合った発展と見ることができる。

刷毛目は、粉粧の技法の自然な流れと考えられる。印花刷毛目では、茶碗の外側だけを刷毛目にしているのが少ない。ここまでくれば、刷毛目に自然につながる。内側の印花をやめて、刷毛目だけにしたのが刷毛目茶碗である。掻き落とし手も、鉄絵三島も、粉粧は、刷毛で行ってきたから、刷毛目は、刷毛を使った究極の簡略化された技法なのである。無地刷毛目は、掻き落とし手や鉄絵三島の粉粧は素地が見えないように刷毛で塗った名残り（あるいは、掻き落とし手のところに分類されるべきかもしれないが、刷毛目にこだわると、刷毛目のなかに分類することになる。）であり、刷毛目線刻は、掻き落とし手が粉粧をしたあとに線刻をした名残りであろう。そして刷毛目は、印花刷毛目の刷毛目を継ぐ技法である。したがって、掻き落とし手から刷毛目までが、刷毛による粉粧である。

粉引は、刷毛を使わない。初めは、器に白泥（カオリン）を掛け、次の段階には器を、そのまま白泥に浸した。掛け技法と浸し技法があるけれども、ともに刷毛のあとはない。掛け技法には、火間があったり、釉薬が重なったところは厚くなっている。刷毛で塗っても釉薬の厚いところは釉垂れを起こすが浸し技法の方が釉垂れは著しい。雨漏り手は、白磁をめざし、釉薬も均一で透明である。一見白磁と区別できないものもあるが、分院ができたりして、白磁に替わられていって、粉粧磁も消滅していった。

以上、三島は、粉青磁（象嵌・印花）の時期、刷毛による粉粧磁（掻き落とし手・印

花刷毛目・粉粧鉄絵・刷毛目) と掛け技法・浸し技法による粉引粉粧磁の三つに大きく分けることができる。

これら粉青粉粧磁こそ、朝鮮で独自に発達し、世界に類をみない独特の陶磁器なのである。

(注)

- (1) 阿部誠文「朝鮮陶磁器」の分類Ⅱ 粉青磁『福原学園 生涯学習センター紀要』2007年3月 34ページ。
- (2) 阿部誠文の造語による呼称。
- (3) 林屋晴三『高麗茶碗 第1巻』中央公論社 1991年11月 233ページ
- (4) 尹童二著・片山まび訳『韓国陶磁史の研究』淡交社 1998年10月 353ページ。
- (5) 常石英明『朝鮮陶磁の鑑定と鑑賞』金園社 1985年10月 205ページ。
- (6) 山田万吉郎『三島刷毛目』宝雲舎(景仁文化社版 1982年3月) 27ページ他。
- (7) 阿部誠文の文類上の造語で、韓国語の言い方を取り入れたもの。茶の湯では、無地刷毛目という。
- (8) 阿部誠文の文類上の造語。技法による。
- (9) 同上

忘れられた共同体的感覚

馬場 雅典

九州女子大学人間科学部人間文化学科教授

キーワード：自己批判の内省、文明生活、共同体的感覚

A Forgotten Sense of Community

Masanori BABA

Professor, Department of Humanities, Faculty of Humanities,
Kyushu Women's University

ABSTRACT

The purpose of this paper is to find out the common theme of a sense of community in three literary works which were published at different periods in Japan and America. The three literary works that I will discuss are "Absolution" by F. Scott Fitzgerald, *Sekai no Chushin de Ai wo Sakebu* by Kyouichi Katayama, and "I See You Never" by Ray Bradbury.

In "Absolution," a sense of community is embodied in the priest's demeanor. He assumes his responsibility for asking a question at the confession which prompts the boy to tell him a lie and thereby causes him fear and pain. He finds profound humanity in the boy's statement that "with gathering nausea" the boy had "felt his heart—valves weakening at the will of God." The priest knows that he is risking his status as a priest but despite that helps the boy out of his difficulty, thus revealing his belief in the importance of human communion.

At the beginning of the novel *Sekai no Chushin de Ai wo Sakebu*, we witness the protagonist Sakutaro's pain in the fact that he cannot find any connection between him and his surrounding world. At the core of his suffering is his inability to forget the willful cruelty with which he had ignored his girlfriend's need to escape from the fear of dying of leukemia. He realizes that

the reason for his cruelty to Aki lay in the fact that he was unconsciously immersed in the imaginary world of his own civilized life. This realization comes to him when he recollects the past scene in Yumeshima, in which he was standing at the threshold of a room listening to Aki humming a song. This was one of the few places that he and Aki had enjoyed themselves. This is the author's evocation of Sakutarō's long forgotten sense of community and a suggestion that he could find a measure of healing for his wounds.

In "I See You Never", as Cleanth Brooks and Robert Penn Warren say, through the awareness of Mrs. O'Brien, we become aware of the difficulty of human communion within the civilized world, but at the same time we realize the author's belief that as human beings we are not alone, and that ultimately we can understand each other.

KEY WORDS : self-reflection, civilized life, a sense of community

はじめに

しばらく前になるが、片山恭一著『世界の中心で、愛をさけぶ』が、映画化、テレビドラマ化されたことがきっかけになって、発行部数が徐々に伸びていき、最終的には320万部のベストセラーになるという社会的現象があった。売れ行きを伸ばした理由の大半が、本の帯に書かれた、さる女優のことはばに代表されるように、作品の持つセンチメンタリズムではあるだろう。

しかし、この作品がベストセラーになったのはただそれだけの理由からだろうかという疑問が筆者にあった。この作品は「きわめて「文学的」であるという高橋源一郎氏の指摘は自説を支持してくれた¹。高橋氏がこの作品が文学的であるというとき、どのようなことを意味しているのかは定かではない。しかし、高橋氏のことはばはセンチメンタリズムとは別の性質が作品にあることを保証してくれた。

アメリカ文学を専攻している関係で、これまで主としてアメリカの文学作品を読んできたが、『世界の中心で、愛をさけぶ』と同じような性質の作品がアメリカ文学にもあることに気づいた。スコット・フィッツジェラルドの短編「罪のゆるし」とレイ・ブラッドベリーの「もう会えない」である。

スコット・フィッツジェラルドの「罪のゆるし」は短編小説であるが、作者の作家としての経歴において、ある重要性を持っていると思われる。それは、執筆態度として、作者がセンチメンタリズムを排し、それに替わるものを提示しはじめた作品と考えられるからである²。センチメンタリズムに替わるものというのは、私見では、自己批判に裏打ちされた理想主義である。この作品が雑誌に掲載された当時、作家志望の1青年がこの作品を読んで、フィッツジェラルドが自分たちのリーダーであることを再認識したと言ったということを、フィッツジェラルドの編集者はフィッツジェラルドに手紙で伝えている³。この青年は作品に上に指摘したような作者の姿勢を読みとったものと思われる。

レイ・ブラッドベリーの「もう会えない」にも、作家の姿勢として同様のことを指摘することができる。主人公の自己批判性は「罪のゆるし」とは異なるが、自己批判が理想主義に帰着する点でこの2つの作品は共通している。「みずうみ」は、初めて雑誌に掲載されたブラッドベリーの短編小説である⁴。これは、他者とは相容れない自分の世界を美しいセンチメンタリズムで描いた作品と思われる。フィッツジェラルドと同様に、ブラッドベリーも、「みずうみ」から3年後の1945年に執筆され、2年間寝かしておいたのちに雑誌『ニュー Yorker』に掲載された「もう会えない」⁵において、理想主義に路線変更している。

因みに、片山恭一の処女長編『きみの知らないところで世界は動く』において、作品の最後の重要な箇所、ブラッドベリーの「みずうみ」が言及されている⁶。片山恭一も処女長編において、センチメンタリズムに基本的に依存しているのではない

か⁷、そして、処女長編とは違った主人公の自己批判的内省を描き込み、その上で作者の理想主義を提示しているのではないかというのが『世界の中心で、愛をさけぶ』に関しての本稿の仮説である。

以上の3つの作品における主人公たちの自己批判を通して描かれている理想主義は、文明によって見失われがちな“共同体的感覚”と言えるようなものではないかと思われる。以下は、そのような観点から3つの作品を考察した試みである。

I スコット・フィッツジェラルド著「罪のゆるし」

作品のあらすじは以下のようである。

ある土曜日の夕方のこと、1ヶ月以上懺悔に行っていないために、ルドルフ少年は父親から強制されて懺悔に行く。少年には懺悔に行くことを渋る理由があった。彼は同じ年頃の男女が性的な話に興じているところを立ち聞きして、これまで経験したことのない興奮を覚えたのだったが、それを神父に告白することができなかった。告解が進み、少年はそのことを隠すことができなくなり告白する。すると神父は「君はそこから立ち去るべきだった。女の子にも立ち去るように君は言うべきだった」⁸と諭す。自分がそのとき覚えた自然な反応を否定する神父の言葉に少年が内心反発を感じていると、神父は「これまでに嘘をついたことはないかね」(163)という質問をする。少年は咄嗟に「嘘は決してつきません」(163)と口走ってしまい、後悔して取り消そうと思っているところで告解の扉が閉まり、機会を逸してしまう。帰宅した少年は一晚中悩んだあげく、翌日の日曜日の早朝に起きて水を飲んだ痕跡を作ろうとしているところを、起き出してきた父親に見つけられる。今日は聖餐式の日であり、水を飲めば聖餐式に出席することができないという教会の掟を逆手にとって、少年は水を飲んだ証拠を残すことで、神父への嘘と嘘をついたまま聖餐式に出るという二重の悪を避けようとしていた。父親はそうとも知らず、その行為を少年が非行に走ろうとしている証拠と思い込み、身体的暴力を加える。結局、少年は懺悔を受けさせられたのちに聖餐式を受けることになるが、そのとき神への恐怖におののく。そして、それから2日間自責の念に苛まれ、ついに神父のもとに来て、一部始終を語る。告白を聞いた神父は、少年の恐怖を取り除こうと努める。少年は神父に一部始終を語ることによって恐怖から解放される。しかし、神父は少年とは対照的に絶望の叫びとともに崩れ落ちる。

以上のあらすじからは、この作品が少年に関わることに思えるが、少年の問題は、全てを神父に語ることによって解決しているのであるから、最終的に問題なのは少年ではなく神父である。

神父を中心に作品を辿りなおすと、まず1章の初めで神父の内面が描かれたあと、1章の最後で少年が神父のもとを訪れる。神父は落ち着いて少年に対応し始める。し

かし、少年が先述の経験を2章から4章にかけて語ったあとの神父は、混乱し、当惑していて、咄嗟に少年の告白に対応することができない。少年の語りの何が神父にそのような衝撃を与えたのだろうか。このように問うとき、神父の存在が俄然リアリティを帯びてくる。つまり、神父は少年の語る内容を追体験しているとみなすことができ、少年の語りを神父が追体験していると見なすと、作品の1章の初めの神父に関する客観的叙述が、客観的叙述ではなくなり、2章から4章の少年の語りと相俟って、神父の内面の全容を浮かび上がらせることになるのである。それは以下のようなものである。

1章で描かれる神父は、神との深い交わりができないことに苦しみ、「真夜中に冷たい涙を流す」(159)と書かれている。神父の苦しみは何であるかは1章では明かされないが、2章から4章において、少年の経験に加えて、少年の家庭や地域社会が点描されることによってそれが明らかになる。そこに描かれている地域社会のありさまは、その地域が貧しく、住民がもっているのは物質的に豊かな生活への憧れのみであるということ、そして、住民にとって教会は、自分たちの貧しい現状と憧れの落差を埋めてくれる精神衛生上必要なものとしてしか考えられていない、ということである。このような地域社会の描写から、職業上は地域社会の精神的指導者でありながら、自分の存在価値が地域社会によって常に無価値化されるのを神父が内心感じているのではないかと考えられる。しかし、そのことから住民へのひそかな憤怒が生まれる可能性はあるだろうが、神父の憤怒は作品のどこにも見当たらない。

1章に描かれている神父の特徴がもう一つある。貧しい地域で文明の魅力をひとときわ発散する事象を、神への帰依の思い入れによってロマンティックに夢想する傾向である。神父が往来する牧師館から教会のあいだにドラッグストアがあり、そこを通るたびに、彼は店内の照明やソーダファウンティンのニッケルの蛇口のきらめき、化粧石鹸の甘美な香りに惹かれている。土曜日の夜に告解を済ませての帰路、ドラッグストアからの「石鹸の匂いが自分の鼻孔にとどく前に上空に立ちのぼってしまうように道の反対側を歩」くようにしているが、そのとき「夏の月に向かって昇っていく」「石鹸の匂い」は、「香のよう」(159)だと喩えられていて、神父のロマンティックな性癖が提示されている。

このようなロマンティックな夢想と、神との深い交わりができないゆえに真夜中に流す涙は、神父の抑圧の形態であろう。真夜中に流す涙が「冷たい」と形容される所以であろう。

この神父の生き方が少年の告解に伴う経験を左右する要因になっている。少年が同年輩の男女の性的な話に初めて興奮を覚えたことに対して、神父が口にする「君はそこから立ち去るべきだった。女の子にも立ち去るように君は言うべきだった」という少年への諭しは、上述の神父の特徴であるロマンティックな夢想の発現である。しかし、これも上述のように、自らの存在価値が地域社会によって常に無価値化されると感じている神父は、諭す傍らからそれが無意味かもしれないこと、あるいはそれが自

己欺瞞であることを感じていると考えられる。普段はその想念を自分のなかに禁欲的に封じ込めている。「嘘をついたことはないかね」(163)という問いかけは、そのような生を生きている自分への批判であると解することができる。しかし、そのことばは少年という他者に向けられていることも事実である。とすれば、そのことばは、普段神父が抑圧している他者への憤怒、つまり他者否定を隠し持っているということになる。

少年の語りのなかのことばが、このような神父の自己批判を顕在化する。それは、日曜日の聖餐式に臨んで、「神の意志で自分の心臓の弁膜が弱められる」(168)と感じたと少年が告白するときである。少年が覚えたこの感覚の正体は自己処罰の感情である。少年は聖餐式に臨む前に再度、懺悔をするように父親から強制されたとき、神父に対して他者否定の感情に身を委ねた。自己処罰はそのことに対する自責の念であるが、自責の念は少年の人間的な立ち直りの証左である。

少年の告白は、神父にふたりが同一の問題を抱えていることを明かす。同時にそれは、これまでの聖職者として働きが無駄ではなかったことを神父に明かす。終章における神父の少年に対する接し方には、神父の聖職者としての本質が現れている。一例を挙げると、次のように神父は少年の五感に訴えるような語りを展開する。「背信というのはそれ以前の完璧な信仰があって、はじめて厳罰を意味するのだよ。これで解決したかね」(170)前半の文章の意味は少年には分からないが、あとの「これで解決したかね」という文章は少年にも分かる。というのは、「嘘をついたことはあるかね」という神父の問いかけに対して嘘をついたとき、即座に撤回しなくてはと少年が考えたとき、少年自身が使ったことばだからである。神父はこのように、少年の内面を辿るようにして接している。神父のこの態度は共同体的感覚に根ざしていると言うことができるだろう。

しかし、「罪のゆるし」の終章では、共同体的感覚による神父と少年の新しい関係は描かれていない。それどころか、相手の少年は神父らしくない言動を見せつけられ、恐怖を覚えて逃げ出していく。このあと少年の口を通して神父の異様な行動が発覚すれば、悲惨な現実が予想され、それゆえに、神父は絶望の叫びとともに崩れ落ちる。

これが社会の現実であろう。しかし、作者はこの結末を通して理想主義への信念を表明していると思われる。つまり、少年が成長して文明社会での経験を認識する能力ができるようになったとき、彼が神父の真意を理解するだろうということを読者に伝えようとしていると思われるのである⁹。

II 片山恭一著『世界の中心で、愛をさけぶ』

この作品は朔太郎が恋人アキを得て、しばらく幸せに暮らしているが、アキを突然

の白血病で失うという経験を扱っている。

扱っている材料はそのようなものであるが、小説の関心はいかにして朔太郎がアキを亡くした痛手から脱したかということである。作品の終章では、恋人アキを亡くした10年後に、朔太郎が新しい女性と故郷を訪れ、アキの面影に別れを告げることになる。その部分には全体で206頁の小説のうち、わずかに6頁が割かれているだけであり、終章で物語が展開するわけではない。従って、最後の6頁以前に朔太郎の立ち直りが描かれていると考えなければならない。それはどのように描かれているか、アキを亡くした時点から後の朔太郎の空白の10年間はどのようなようであったと示唆されているかを、これから示したい。

作品は、世界とのあいだに繋がりを見出せないでいる朔太郎の状態の描写で始まる。

朝、目が覚めると泣いていた。いつものことだ。悲しいのかどうかさえ、もうわからない。涙と一緒に、感情はどこかへ流れていった。しばらく布団のなかでぼんやりしていると、母がやって来て、「そろそろ起きなさい」と言った。¹⁰

このように自分と世界のあいだに繋がりを見出せないでいる朔太郎の内面はどのように構成されているかを、以下説明したい。

アキが朔太郎にとって特別な人になったきっかけは、中学3年時に女性の担任の葬儀で弔辞を読んだ彼女に衝撃を受けたときである。それは、「見慣れたセーラー服に身を包んでいる彼女が、ここからだともまるで別人のように見えた。」(23)「いま大人になりかけた一人の女として立っていた。」(24)と書かれている。

アキが朔太郎にこのとき特別な人になった理由は、作品が進んだ時点で明かされることになる。朔太郎が自分と世界のあいだにどのような繋がりも見出せないで苦しんでいるときに、親友の大木がアキの声に関するエピソードを口にするときである。

「中学の音楽の時間に歌のテストとかあっただろう。『若い力』とか『贈る言葉』とか、うざったい歌をいっぱいうたわされたじゃない。そういうときの広瀬の声って、ちっちゃくて全然聞こえなかったんだよな。おれなんか前のほうの席に座ってたけど、何うたってんのかわかんなかったもん」

「途中で誰かが、聞こえませんで怒鳴ったことがあったよな」

「そうそう。それで彼女の声はますます小さくなって、可哀相なくらい顔を真っ赤にして、下を向いたまま最後までうたったんだ」(199)

ここに言及されているのは中学2年のときのことである。大木とアキと朔太郎が同クラスだったのは2年生のときで、3年生になるとアキと朔太郎はクラスが分かれる。そして、葬儀でアキが弔辞を読むのを朔太郎が聞いたのは中学3年のときである。こ

れらを考え合わせると、弔辞を読むアキは、音楽の時間の必死に自分の限界内で責任を果たそうとした彼女と二重写しに、しかも今度は大人もいる実社会のなかで立派に機能を果たしていると朔太郎に映ったとみなすことができる。

ここで注目したいのは、朔太郎が惹かれる弔辞を読むアキの声はスピーカーによって拡大されているということである。つまり、アキはこのような文明の利器に象徴される文明的生活を疑いなく受け入れている時代の申し子によって虚構化されているアキである、ということである。「世界が与えてくれる果実の、いちばん美味しい部分だけをかすめ取っているような気分だった。」(67)と朔太郎が告白しているのはこのようなことである。

以上から、アキにたいするイメージに示唆されているように、朔太郎の根底にある苦勞しながら進む人間観が文明的な魅力ある人間観によって封じ込められている、といえよう¹⁴。これが朔太郎にとっての問題の根本である。

文明的生活に価値を置く朔太郎の虚構の世界に対置されているのが、完治する確率が少ないアキの白血病である。だから、アキの病気の悪化という現実が朔太郎の虚構の世界にひび割れを生じさせる。

「代わってあげられるといいんだけどね」

「実際にこの辛さを体験したら、そんなこと言えなくなると思うわ」

部屋の空気にピリッとひび割れが走ったようだった。(124)

彼女はアボリジニの世界観や伝統的な生き方に興味を持っていた。(中略)

「アボリジニになっちゃうと、プッチンプリンやダイジェスティブ・ビスケットを食べられなくなる」

「どうしてそんな物質的なことばかりに目を向けるわけ？」

「アボリジニって、みんながみんなアキが考えてるほどいい人たちには見えなかったよ」

ぼくは実際に目にした事実を口にした。「なんだか自堕落で不健康そうに見える人もいたな。昼間から酒は飲むし、観光客に金はせびるし」(126-127)

朔太郎の虚構の世界をアキが病気のゆえに否定するとき、アキがアボリジニに託して死の苦しみから逃れようとしていることを理解していながら、彼はアキの心を無惨に傷つける。それによって、朔太郎の虚構の世界は崩壊の危機に瀕する。

そして、二人の間の傷口が開いたままアキが死ぬとき、朔太郎は自分だけの想念によってひび割れの補綴をするほかない。朔太郎はそれを血みどろの回想と言っている。

「その思い出に触れようとすると、ぼくの手は血だらけになってしまう。」(161)

「過去には、触ると血の出るような思い出が転がっていた。ぼくは血を流しながら、そんな思い出を弄んだ。」(174)

以上辿ってきたことが、作品の最初で自分と世界のあいだに繋がりを見出せないでいる朔太郎の内面を構成している内容である。

この状況にいたって初めて朔太郎は、スピーカーによって魅力を増したアキではなく、その背後に彼が見ていた等身大の彼女を呼び覚ます。親友大木が思い出したアキの声に誘われて思い出すのは、それまで一度も彼の意識に浮かばなかったアキである。

ぼくもまたアキの歌のことを考えていた。学校の歌のテストとは別の場面だった。島のホテルに泊まった夜、二人で夕食の支度をしているときに、途中で必要になったものがあり、三階の部屋へ取りにいった。戻ってみると、アキは野菜が何かを刻みながら、小さな声で歌をうたっていた。厨房の入り口に足を止めて、彼女の歌に耳を澄ませた。たしかに声は小さくて、歌詞はおろかメロディさえ聞き取れないほどだったが、アキは気持ち良さそうにうたっていた。家で料理を作るときなど、きっとこんなふうに歌をうたうことがあるのだろうと思った。声をかけると、そこでおしまいになってしまう。ぼくは厨房の入り口に佇んだまま、彼女の歌に耳を傾けつづけた。(199-200)

このアキのイメージは、音楽のテストのとき小さな声で顔を真っ赤にしながらうたっていたアキと同じものである。朔太郎は文明生活に安住する虚構の世界から脱し、人間的な日常感覚(共同体的感覚)を取り戻している¹²。

この節の冒頭で提示した問題の一つである朔太郎の立ち直りは以上のように描かれている。では、提示したもう一つの問題、朔太郎のその後の10年はどのようなようであったろうか。それは、人間関係において、人間的な日常感覚を奪われたり、取り戻したりしながら、そのような基軸を打ち立てようとする連続ではなかったかと思われる。我々が朔太郎の新しい門出を奇異に感じることはないのは、終章直前で語られることと終章がこのような内容で繋がっているからではないだろうか。

Ⅲ レイ・ブラッドベリー著「もう会えない」

この作品は、ミセス・オブライエンが経営する下宿屋の間借り人であるミスタ・ラミレスが、一時入国ヴィザの期限が半年間切れていたために母国メキシコに強制送還されることになり、帰国する前にミセス・オブライエンに最後の挨拶をするためにやって来るといふ作品である。

小品ではあるけれども、先の2つの作品と同じように、作中のディテールが効果的に使われている。基本となっているのは文明対非文明である。アメリカに文明が託され、ミスタ・ラミレスの故郷メキシコに非文明が託されている。

アメリカ文明の特徴は物質的豊かさ、快適、清潔であり、ミスタ・ラミレスはそのような生活に馴染んでいて、故郷に帰りたくない。彼は「清潔で小さな部屋」に住み、「光沢のある青いリノリウム、花柄の壁紙とそこにかかった絵やカレンダー」¹³に囲まれている。現に今いる勝手口からは、「長いテーブルが見え(て)、テーブルには白いテーブルクロスがかかり、皿や、涼しげに光るグラスや、中に角氷の浮かんだ水さしや、新鮮なポテト・サラダの入った鉢や、角切りにして砂糖をまぶしたオレンジやバナナの入った鉢なんか並んでいた。」(206-207)

「家主のミセス・オブライエンは規律には厳しいが親切な人」(206)であるので、ミスタ・ラミレスは彼女の期待を裏切らないようにしてきた。作品の冒頭の一節にはそれが表われている。

台所のドアが小さくノックされた。ミセス・オブライエンがドアを開けると、バック・ポーチには彼女の最良の間借り人であるミスタ・ラミレスがいた。警官が二人、その両わきに立っていた。ミスタ・ラミレスは二人の間に挟み込まれるように、からだを小さくしていた。(205)

まず、「台所のドア」、「バック・ポーチ」ということばは、ミスタ・ラミレスが他人の眼に気を遣って、ミセス・オブライエンの迷惑にならないようにわざわざ裏口に来ていることを表わしている。さらに「台所のドアが小さくノックされた」とあるのも、彼がミセス・オブライエン宅の夕食を中断することに対して申し訳なく思っていることを表わしている。このようなミスタ・ラミレスの洗練された繊細さには、彼が自分に親切なミセス・オブライエンの期待を裏切らないように心掛けていることが窺える。

2人の警官とミセス・オブライエンの息子の言動はミスタ・ラミレスとは対照的である。ミスタ・ラミレスが深刻な状況にあるにも拘らず、息子の一人は「ねえ母さん、ご飯が冷めちゃうよ」(209)と言い、後に再び「急がないと冷めちゃうぜ、母さん」(211)とその場の雰囲気を見殺した暴言を吐いている。また、警官二人はミスタ・ラミレスの不幸な事情を知っているにも拘らず、彼が他人の優しさに触れ、感極まって口にする、「二度と会いません、二度と会いません！」(211)という表現が文法的に間違っていることに対し、「警官たちはこれを聞いて微笑んだ。」(211)とある。こういった状況下でミスタ・ラミレスの文法上の過ちを軽蔑する警官たちの行動は非人間的である¹⁴。

しかし、彼らは非文明国メキシコの住人としてミスタ・ラミレスを差別視する自分たちに批判的ではない。この作品で唯一自己批判的なのはミセス・オブライエンだけ

である。だが、彼女の自己批判はあからさまにではなく、苦心されて描かれている。「メキシコ国境近くのいくつかの小さな町」を旅したときの、「車も走っていないし、建物ひとつ建っていない。まったく何もない」(210)という彼女の回想は、ミスタ・ラミレスが享受しているアメリカの快適な豊かな生活と好対照をなして、メキシコに帰りたくない彼の気持ちに信憑性を与えるとともに、彼女がミスタ・ラミレスの心情を理解できるはずの唯一の人物であることを示唆している。従って、次のように彼女はミスタ・ラミレスに同情する。

「本当にお気の毒です、ラミレスさん」と彼女は言った。

「私だって帰りたくないんですよ、奥さん」と彼は弱々しい声で言った。「ここが気に入っているし、ずっとここに住んでいたいんです。…」

「お気の毒だと思います。ラミレスさん」と彼女は言った。「私に何かできることがあればいいんですが」

「ああ、奥さん！」と言って、彼は急に泣き出した。瞼の奥から涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。(210-211)

しかし、ミセス・オブライエンはこの時点ではことばとは裏腹に真の同情を感じてはいなかった。

彼女がミスタ・ラミレスの気持ちを真に理解するのは、ミスタ・ラミレスが去ったあと、冷めたステーキを食べるときである。

「いま、ふと分かったのよ」とミセス・オブライエンは言った。彼女は手を自分の顔にあてた。「私はもう二度とラミレスさんとは会えないんだってね」(211-212)

ミセス・オブライエンが、このように遅ればせながらの認識しか得ることができない理由は作品の導入部分に既に書き込まれている。

冒頭の一節で、ミスタ・ラミレスは、ミセス・オブライエンにとって、「最良の間借り人」(205)であり、また、彼は「週に一度だけ酔っばらったが、ミセス・オブライエンに言わせれば、それくらいは良き労働者には当然許されてしかるべきことであった。とやかく文句をつけるほどのことでもない。」(206)とある。ミスタ・ラミレスにたいするミセス・オブライエンのこのような気持ちは次のミスタ・ラミレスの職業と関連づけて考えることができる。

戦争中、(ミスタ・ラミレス)は飛行機工場で飛行機の部品を作った。その飛行機は完成するとどこかに飛んでいってしまった。そして戦争が終わった今でも、彼

はまだその職を確保していた。(206)

周知のように、アメリカはここに言及されている第2次世界大戦によって1930年代の不況を脱した。貧しい外国は戦後の裕福なアメリカの出現に寄与した。同情すべきミスタ・ラミレスの境遇にたいしての彼女の鈍い感受性は、戦後の豊かな生活を享受しているアメリカ国民の無反省で無批判な姿勢を表していると解することができる。ミセス・オブライエンのミスタ・ラミレスにたいする等閑視または蔑視は、このように、先に見た息子や警官たちの言動においてよりも微妙にかつ巧妙に描かれている。

では、そのようなミセス・オブライエンを模範にし、彼女が自分の気持ちを理解し、それをしっかりと受けとめてくれたと思ったミスタ・ラミレスの感極まった言動は茶番だろうか。そうとは思えない。作品の最後における彼女の認識の吐露は、意識せずして自分のなかに染み込んでいる文明的価値観への自己批判を表明している。

『小説の理解』を著したロバート・ペン・ウォレンとクリアンス・ブルックスは、この作品の最終的認識はミセス・オブライエンの認識を通して読者が持つ認識であると言っている¹⁶。それに従えば、最後にミセス・オブライエンがミスタ・ラミレスの心情を理解することができたことを明らかにすることによって作者が読者に認識させようとしているのは、文明の価値観に呪縛されることへの警鐘であるとともに、人間相互の完璧な交流は実現できないかも知れないが、必ずやどこかで引き受けてくれる者がいるという意味で人は孤独ではないという、人間にたいする信頼であると思われる。それは共同体的感覚と称しうるであろう。

おわりに

以上、いづれも文明化された生活のなかでの存在の問題に直面した人物を忠実に描いているという観点で3つの作品を考察してきた。3つの作品とも文明の進歩や発展が見られた時期に出版されている。「罪のゆるし」が発表されたのは、第1次世界大戦後にアメリカが未曾有の繁栄を歩み始めた頃であり、「もう会えない」が発表されたのは、先述のように、アメリカが第2次世界大戦に必要な兵器類を生産する軍需産業によって30年代の不況から立ち直った時期である。『世界の中心で、愛をさけぶ』の出版は2001年であるが、日本が高度成長が高じてバブルを迎えたあと、バブルがはじけた時期が背景である¹⁶。

3つの作品の作者とも、文明の進歩や発展は人間の存在のあり方や人間関係のあり方に益しなかったという見解である。「罪のゆるし」において、神父の自己批判の背景としてあるもの、『世界の中心で、愛をさけぶ』において、日常感覚への朔太郎の覚醒を封じ込めていたもの、「もう会えない」において、ミセス・オブライエンの認識を隠

微に抑圧していたもの、これらは文明的なものであった。

しかし、3名の作者とも文明批判に留まらず、主人公たちによる文明のなかの自己への批判的認識を通して、文明的状況における人間存在の問題を解決する可能性を有するものとして共同体的感覚を提示している。

注

1. 高橋源一郎『ニッポンの小説 百年の孤独』文藝春秋, 2007年, 104頁。
2. フィッツジェラルドは1923年のGillett Burgessへの手紙で、センチメンタリズムは登場人物の性質としては悪くないが、作家の態度としては良くないという考えを表明している。F. Scott Fitzgerald, *Correspondence of F. Scott Fitzgerald*, ed. Matthew J. Bruccoli and Margaret M. Duggan, with the assistance of Susan Walker (New York: Random House, 1980), 137.
3. F. Scott Fitzgerald, *Dear Scott/Dear Max: The Fitzgerald-Perkins Correspondence*, ed. John Kuehl and Jackson R. Bryer (New York: Charles Scribner's Sons, 1971), 77.
4. レイ・ブラッドベリ『ブラッドベリがやってくる』小川高義訳, 晶文社, 1996年, 33頁。
5. Ray Bradbury, *Conversations With Ray Bradbury*, ed. Steven L. Aggelis (University Press of Mississippi, 2004), 4.
6. 作品の終盤で、主人公の友だちであるジーコが海で入水自殺をしたあと、小説には次のように書かれている。「ジーコが発見されるまでに、それほど時間はかからなかった。彼は九月の海底に、藻にからまるようにして沈んでいた。(中略)ボートに死体が引き揚げられるのを、波打ち際から見ていた。前にも一度、これと同じことが起こったような気がした。そのうちに、この既視体験めいた感じの原因に思い当たった。夏休みにジーコのアパートで読んだ、レイ・ブラッドベリの短編だった。そのなかの「みずうみ」という作品に、これとそっくり同じ場面があった。」片山恭一『きみの知らないところで世界は動く』ポプラ社, 2003年, 284頁。
7. 『きみの知らないところで世界は動く』の主人公と『世界の中心で、愛をさけぶ』の朔太郎の考えは似ている。しかし、類似しているけれども、2つの作品は質が異なると思われる。処女長編においては、主人公、カオル、ジーコは自分たちの親や周りの世界をリアルに感じるができないという問題を共通に抱えていて、小説はそれの解決に向かっていることが感じられるが、彼らの問題の描写自体が不十分であるように思われる。
8. F. Scott Fitzgerald, *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald*, ed. Malcolm Cowley (New York: Charles Scribner's Sons, 1971), 162. 日本語訳は引用者。以後「罪のゆるし」からの引用はこの版による。

9. 「罪のゆるし」に触れた手紙で、神父が自分は少年の感じたものよりもより大きな恐怖と深い絶望に捕らわれていることを示すことによって、少年に罪のゆるしを与えている、という主旨のことを作者は書いている。F. Scott Fitzgerald, *Correspondence of F. Scott Fitzgerald*, 212.
10. 片山恭一『世界の中心で、愛をさけぶ』小学館, 2001年, 1頁。以後この作品からの引用はこの版による。
11. 司馬遼太郎の文章に文明に関する次のような一節がある。「“文明材”というのはこの場かぎりの私製語で、強いて定義めかしくいえば、国籍人種をとわず、たれでもこれを身につければ、かすかに“イカシテイル”という快感をもちうる材のことである。普遍性（かりに文明）というものは一つに便利という要素があり、一つにはイカサなければならぬ。」司馬遼太郎『アメリカ素描』読売新聞社, 昭和61年, 38頁。
12. ライターズ・ジムは、「朔太郎が見出した「世界の中心」とは、(中略)二人が過ごした何気ない日常にこそありました。」と述べている。2人が過ごすときのなかでも日常といえるのは、アキが主導権を握っているときであり、「世界が与えてくれる果実の、いちばん美味しい部分だけをかすめ取っているような気分だった。」と朔太郎が述べているのと対照的な状況である。それを表しているのは、生活が文明的でなかった時代の男女の強い精神的絆を表象している朔太郎の祖父の心情をアキが解するのに対して、朔太郎にはそれが困難なところである。しかし、内省の果てに、アキの声の甦りという形で、朔太郎はそのような日常を取り戻すのである。ライターズ・ジム『謎解き「世界の中心で、愛をさけぶ」』夏目書房, 2004年, 82-83頁。
13. レイ・ブラッドベリー「もう会えない」ロバート・シャパード/ジェームズ・トーマス編『SUDDEN FICTION 超短編小説 70』村上春樹/小川高義訳, 文春文庫, 1994年, 205-206頁。以後この作品からの引用はこの版による。
14. 村上春樹氏は警官たちは「微笑んだ」と訳しているが、「にやっと笑った」あるいは「含み笑いをした」と訳しても良い。この日本語訳だと警官たちの軽蔑があからさまになる。「微笑んだ」という日本語訳だと文明化された国に住むアメリカ人の上辺の礼儀正しさが出る。村上訳はその意図があるのかもしれない。いづれにせよ、警官たちの反応がミスタ・ラミレスの窮状に対する同情に欠けることは確かである。
15. Cleanth Brooks and Robert Penn Warren, *Understanding Fiction* (New York: Appleton -Century-Crofts Meredith Corporation, 1959), 136.
16. ライターズ・ジムは、「(朔太郎とアキ) が生きた一九九〇年前後は、日本人がバブルで浮かれていた時期と重なって」いる、と述べている。時期的にはそうかもしれないが、朔太郎とアキが行く夢島は荒廃したレジャーランドであり、バブルがはじけた時期が想定されてもいる。『世界の中心で、愛をさけぶ』は、作品が執筆された2000年前後から「バブルで浮かれていた時期」とバブルがはじけた時期を検証し、そのあとの日本人の生き方を作者が模索したものと考えることができる。ライターズ・ジム, 前掲書, 44頁。

健康教育のカリキュラム開発に関する基礎的研究
－健康教育の原理と歴史、現状分析を中心として－

木内 隆生

福岡教育大学学校教育学部学校教育講座教授

大庭 茂美

九州女子短期大学養護教育科教授

角田智恵美

九州女子短期大学養護教育科講師

キーワード：四面体モデルの健康観、健康課題、美容系健康教育モデル

**A Basic Study on Curriculum Development
of Health Education**

**－ Focusing on the Principal, History,
and the Actual Condition Analysis －**

Ryusei KIUCHI

Professor, School Education Subjects, Faculty of Education,
Fukuoka University of Education

Shigemi OBA

Professor, Department of School-Nursing,
Kyusyu Women's Junior College

Chiemi TSUNODA

Lecturer, Department of School-Nursing,
Kyusyu Women's Junior College

I. はじめに

1. 問題の所在

健康教育のカリキュラムを検討するとき、この分野で学生に、どのような資質・能力を身に付けさせるかが問題となる。この資質・能力の一つにヘルスリテラシーがある。

一般にヘルスリテラシーは、機能的ヘルスリテラシー、相互作用のヘルスリテラシー、批判的ヘルスリテラシーに分類される。この観点から大竹聡子らは、これまでの学校における健康教育が、機能的ヘルスリテラシーの獲得（基本的な知識の伝達など）に偏っていたと指摘する¹⁾。学生が健康教育に関する生涯の学習者になるためには、相互作用のヘルスリテラシーが身に付く共同的・体験的学習から、批判的学習までへ拡張できるような、学校段階での教育プログラムが必要であるとしている。

地域や職場など健康教育の現場でも、自分自身の健康に問題を感じている人たちだけの健康教育となっているという指摘がある。これまで行われてきた健康教育について、その思考枠組みの転換が求められており、例えば岩永俊博は「問題箇所改修型から生活設計型へ、過去振り返り型から将来像指向型へ、分析的思考から統合的思考へ」という、健康教育の枠組み変革を提言している²⁾。

確かに健康ニードの変化の背景には、物質的な豊かさから精神的な豊かさへという希求の転換がある。志向する健康の水準が、病気の治療や身体の休養などの段階から、アンチ・エイジングやトータル・ビューティなどへの質的な拡がりを感じられる。働くためだけに身体を養護・鍛えるのではなく、生涯年齢まで健康でありたい、いつまでも美しく注目されたいという、積極的・社会的な健康が求められていると言える。

平成19年末に公表された「新健康フロンティア戦略アクションプラン」では、その基本的な考え方を、「すべての国民が健やかで心豊かに生活できる活力ある社会とするためには、健康寿命の延伸や生活の質の向上を図る」と提示した³⁾。特に女性を応援するプログラムでは、「女性が生涯を通じて健康で明るく、充実した日々を自立的に過ごし、能力を発揮することのできる社会を実現するため、・・・(中略)・・・女性の様々な健康問題を社会全体で総合的に支援することが重要」と示している⁴⁾。

本研究は、女子短期大学における健康教育のカリキュラム開発を目的としている。養護教諭養成の視界を少しずつ拡大しながら、これまでの健康教育の目的や意義の検討、歴史や現状の分析を通して、今後の健康教育カリキュラムの方向性や方法論を検討する。その上で健康教育の新たなカリキュラム構成を提言していきたい。

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、健康教育の原理、歴史、現状分析等を踏まえて、将来に向けて健康教育のあり方を検討し、そのカリキュラムを構想することである。

研究方法は、主として文献研究及び資料分析による考察と提言を行う。まずⅡは、健康教育思想の立場から主として大庭が行う。次にⅢを養護教諭養成の立場から角田が、Ⅳのカリキュラム分析その他を木内が担当する。

Ⅱ. 健康教育の今日的意義と健康観

1. 世界保健憲章における健康の定義

WHO(世界保健機構)の健康憲章(1946年)における健康の定義は、「Health is a state of complete physical, mental and social well being not merely the absence of disease or infirmity. (健康とは、身体と心と社会的良好(安寧・福祉)な状態であって、単に病気でないとか、虚弱でないということにとまるものでない。)」であり、今や周知のことである。

現在でも、通常の社会生活上での新聞やテレビなどのマスコミ報道では、「心身の健康」の二元論はたびたび報じられる。しかし第三の、社会的によい状態〈安寧〉の部分については、依然としてやや欠落した議論が展開されているのではないか。心身二元に止まる論調に筆者は危惧の念を抱いているところである。

2. 三次元モデルの健康論

これまでの健康観を比較・検討すると、以下のような(1)~(3)の三つのモデルで整理・図示することができる。

(1) 一次元モデル(図1)

世間で論じられている一般的認識である。古典的な問題意識レベルでもあり、現在ではいくつかの批判点が指摘できるモデルである。



図1. 直線モデル

(2) 二次元モデル(図2)

これが今日世界で定着している三点主義の健康観である。現状の世界保健機構(WHO)憲章に規定されているものであり、国際的な基準といえよう。

これを直線的に羅列して『心的良好-身体的良好-社会的良好』と一次元で並べるのではなく、図2のように三角形(二次元)に構造化したものである。トライアングルに配置することで、それぞれの価値評価を加味できる。

まず、『社会的良好・安寧』が上位に置かれ、健康への目的価値が明瞭になる。また、心の健康と身体の健康は基盤的価値として土台に位置づけられて、頂点である『社会的良好・安寧』を支えるものとなる。底辺で頂点をしっかりと支える作用がイメージできる。

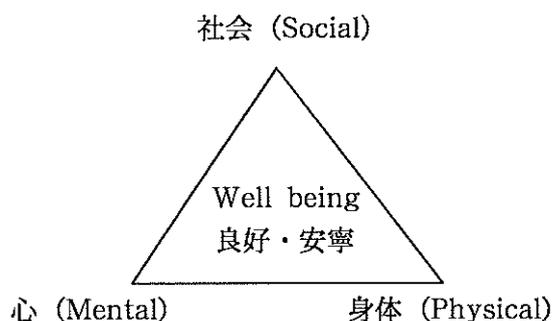


図2. 三角形モデル

(3) 三次元モデル (図3)

1999年のWHO総会において、修正案として提起されたものを基準に考察する。

この案では、まず、「dynamic」という文言が「state」の前に挿入された。「力動的」という概念である。また、新たに「Spiritual well being」が加味され、「靈魂」と訳される第4の要素の健康観が現出したこととなる。

これまでの心と体、及び社会性に加えて「靈魂」がどんな構造で捉えられるか、一つの解答を図3のように示すことができる。

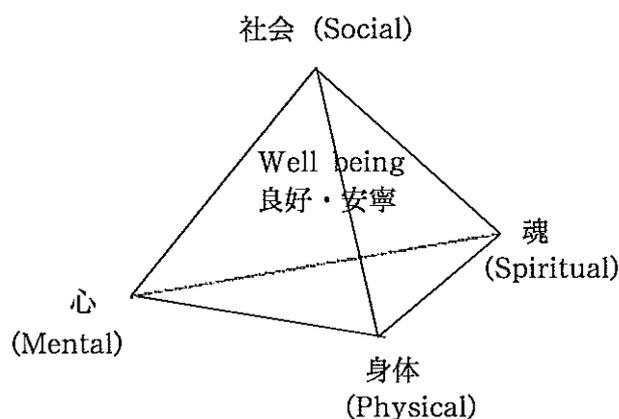


図3. 四面体モデル

ここで取り扱う第4要素の「Spiritual well being」の日本語への適切な翻訳については、語句の混同や混乱が予想され、丁寧に整理する必要がある。その事態は、「Mental」の和訳の多様さが起因している。それには、「心」「精神」「こころ」「気持ち」等が文脈に合わせて、随時に用いられているようである。同様に「Physical」においても、「からだ」「身体」「肉体」「身」「体躯」等、適宜に訳し分けられている。

ところで「spirit」の適切な訳や解釈は実に多様であり、一つの厄介な問題を引き起こす。例えば「spirit」は、名詞では「お酒」の意味にも用いられている。さらに宗教的・精神的な意味の「靈魂」が絡んでくる。アメリカ西部開拓時代の「フロンティア・スピリット」、ドイツの「ゲルマン魂」、本邦の「大和魂」・「大和こころ」と想起されるごとに、精神と魂の訳仕分け議論はややこしくなりそうである。各事象に合わせて、慎重に紐解いていくしかない。

価値の多様性の中で、競争や選抜の争点としたり、互いが排他的となることは避けられねばならない。今日の時点では、「生きがい」と訳して用いることが、平成17年度の文化勲章の榮譽に輝いた医家、日野原重明（1911～ ）によって紹介されている。この柔軟な訳を論者らは感心し、好適な訳であると判断した。ぜひ、訳「生きがい」に組したい。

価値の世界の議論でも、「知識」(knowledge) や「技能」(skill) に第三の価値「態度」が加味されて、真の第一価値「知恵」(wisdom) や第二価値に相当する「技術」(art) となることが知られている。

健康論においても、態度価値の中核的存在と言える「魂」(spirit) が問われていることは意義深いことである。「Spiritual well beingとは何か? いかにあるべきか?」など、今後の健康教育への課題提起と受け止めたい。

3. 全人主義の健康観 - "まめ"の効用-

健康を意味する諸外国語について、宮田尚之の『健康の研究』(1976)に従って吟味する。各国の興味深い国民性と健康観の重層構造に気付くことが出来る。

まず、英語の「health」は、古語の「hoelan」や「hal」から今日の「whole」(完全)に繋がり、「heal」(癒す)と同系でもある。アングロサクソンの健康観は、修復されて欠けるところのない姿をイメージしているようである。

次に、フランス語では、「sante」で英語の「sane」に当たり、その語源はラテン語の「sanus」にあるとされる。意味するところは「正気である」。精神的な正常性・理性・良識に重きを置くフランス人の国民性がにじみ出ている。

更に、ドイツ語では「Gesundheit」で、英語への借用語「Sound」を連想させる。人口に膾炙(カイシャ)された「健全な精神は、健全な肉体に宿る(Sound mind in sound body)」は、ジョン・ロックの『教育の関する若干の考察』に所収の文言である。これによって「Sound」の意味がより鮮明となる。

東洋に目を転ずると、中国の漢民族の文字・漢字の「健康」は建が基本で、にんべんを付けて、人が立っている状態を「健やか」「健全」と考えている。また「健」にも安全な状態が託されており、健康を考えるときの漢民族の安全志向の精神を感じ取れよう。

さて、日本の健やかな状況を描写する言葉は、「まめ」が一番よいのではないか。道徳的態度として「まじめ」「実直」「正直」「素直」を意味し、勤労的行動規範に「生真面目」「気丈夫」となり、さらに身体的運動に「まめやか」「まめどうしい」「まめまめしい」など、様々に包含される総称的言葉「まめ」が健康概念用語として存在する。このことは日本人の健康特性が文化特性を内包して表しており、とても興味深い。これは国際基準としても恥ずかしくない、全人的な健康観用語として評価できよう。

4. 新たな健康観の構造 —美を中心として—

健康な状態の表出形式である「快食・快眠・快便」は、従来から心理学的な3つの快として捉えられている。では容姿や容貌の提供する健康指標は何かと問うと、先ず『美』を挙げられよう。この価値『美』の居場所を学問と価値の図解で考えると、図4のように「十字モデル」で捉えられる。

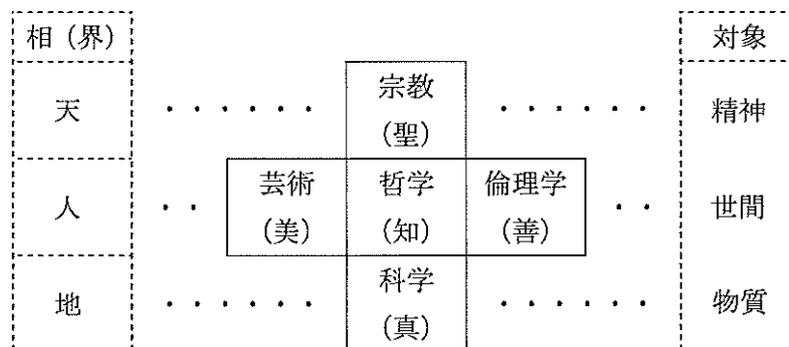


図4. 十字モデル

美(カロス)は善(アガトス)と結合してカロカガティア(善美)として完結する事を健康の帰結と考えることができよう。WHO総会(1999年)で修正された、以下の健康憲章に込められた精神を考えると、健康の構造的理解はますます必要なものと捉えられる。

「Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well being not merely the absence of disease or infirmity.」

III. 健康教育カリキュラムの歴史と展開

1. 健康教育の源流に辿る

健康とは、特定の個人や限られた地域だけではなく、世界万人が何らかの形で興味・関心を抱くものである。日々、健康に関する情報が交錯・氾濫している状況からも、人々の健康への強い希求がうかがえる。健康教育は、これらのニーズに応える働きとして、例えば「個人とコミュニティの健康を促進し、社会の発展を目指すため意識的に構築された学習機会」⁶⁾と定義され、今日様々な分野で展開・機能している。具体的には学校、家庭、職場、地域社会、医療施設などが、直面している健康問題を解決するため、それぞれ固有の課題に応じた健康教育に取り組みつつある。

このように健康教育は、様々な分野を包括的に捉えた構造にある。ここでは、歴史的にみて健康教育の出発点の一つである、学校教育分野における健康教育に焦点を当て検討する。学校教育における健康教育の中核的推進者と言え、まず養護教諭が挙げられよう。養護教諭の養成カリキュラムの成り立ちを振り返ることで、これからの健康教育カリキュラムの行方を展望したい。

2. 養護教諭養成にみる健康教育の歴史

(1) 萌芽の時期

養護教諭は、今日学校現場では欠かせない児童生徒あるいは教職員への心と体の支援者、専門職として認知されている。現在に至るまでには、「学校看護婦」(1905年～)、「養護訓導」(1941年～)など、職名を経るといふ紆余曲折があった。例えば養護教諭の出発点は、学校所属の看護婦として治療、あるいは治療の補助者の役割を担う、教育とは異なる部門の専門職であった。また養護訓導という教育職員の一員としての身分が確立したことは画期的であったが、「養護教諭」(1947年～)と職名が変わった後も、依然として看護婦を基礎資格として養成された期間が存在した。

1953年に免許法が改正され、看護婦を基礎資格としない養護教諭の養成が可能となった。しかし4年制国立・公立大学での養護教諭養成のスタートは、10年以上も先のことである。免許法改正から数年が経過した1962年、私学の九州女子短期大学に、養護教育科が新設された。時代のニーズをいち早く捉えて養護教諭を“教育者”へ高めたという評価ができるのではないか。

(2) 養成所の時期

一般に国が本格的な養護教諭の養成を行うようになったのは、国立養護教諭養成所設置以降と言われる。国立養護教諭養成所設置法(1965年)により設置された養成所は、高等学校卒業後3年間で養護教諭二級免許と中学校二級免許が取得できる機関であり、教員養成学部のある九つの国立大学に付置された。九州では1966年熊本大学に初めて養護教諭養成所が設けられた。1966年当時の教育課程⁶⁾である。

健康教育を担う教員として「保健科教育法」等が設けられてはいるが、全般的に衛生学、看護学、医学等を中心したカリキュラム構成になっている。一方、九州女子短期大学養護教育科では、設置から数年間でカリキュラムの編成方法、技術、及び情報など、総合的に整理・分析を行った。そして以下の4項目を策定した⁷⁾。

- ①健康教育の充実
- ②教員採用試験の高合格率の確保・維持
- ③時代のニーズへの対応
- ④教育実習現場からのニーズに応える

ここで第一に「健康教育」を掲げていることや「時代のニーズ」を重視している点などは、今日のカリキュラム編成を検討する際にも大変重要な視点である。

(3) 健康相談の充実期

さて1975年からは関係者の長年の努力が実現し、九つの国立大学に4年生の養護教諭養成課程が設置された。4年制養護教諭養成課程が設置されて以降大きな変化は、1988年にあった。免許法の大幅改定に伴い、教職科目の単位数が引き上げられ、養護専門科目に関する名称や科目群のまとめ方が改善された。

次に1998年、再び免許法の大幅な改定が行われた。養護教諭免許に関しては実に時代のニーズを反映した改定であった。すなわち、①「健康相談活動の理論及び方法」が新設されたこと、②養護教諭の職務として「学校保健」の中に含まれていたものが独立し「養護概説」になったこと、③「精神衛生」が「精神保健」とされたこと、以上の3点である。また免許法の附則には、経験3年以上の養護教諭は、保健教諭の免許の有無に関わらず、保健学習を担当できることとし、養護教諭の健康教育実施に対する更なる期待が示された。

(4) メンタルヘルス分野への拡張期

次に2008年度の熊本大学養護教諭養成課程のカリキュラム編成である⁸⁾（「保健」の免許については別途設定されている）。前述の養護教諭養成所時代のカリキュラムと比較すると、衛生学、看護学、別に定める保健科教育法等については同様に重視されているが、医学分野の科目が減じ、教育分野の科目の増加が見られる。

心の時代と言われるようになって久しいが、前述の免許法改定もあり「健康相談活動」の設定が注目される。さらに具体的に平成20年度授業計画書⁹⁾を紐解くと、昨今重視されている「食育」推進の一助となる「栄養学実習」（選択）において栄養教育を実施している。保健科教育法の中の一科目である「保健科教育法IV」（選択）においては、心の健康教育としてのストレスマネジメント、対人関係対処スキルを取り上げている点などは、時代のニーズを反映しており興味深い。

表1 熊本大学 養護教諭養成所 教育課程

区分	授業科目	単位		
		必修	選択	
基礎 教育科目	文学	2		
	倫理学	2		
	法学(日本国憲法を含む)	2		
	化学	2		
	生物学	2		
	英語	4		
	独語		2	
	体育	3		
	小計	17	2	
	専門 教育科目	解剖学	3	
		生理学(実習を含む)	3	
衛生学		4		
公衆衛生学		2		
精神衛生学		2		
個人衛生学		2		
衛生法規・衛生統計		2		
栄養学(実習を含む)		4		
食品学		2		
看護原理		3		
看護法(臨床実習を含む)		7		
救急処置(実習を含む)		2		
学校保健(学校安全を含む)		4		
養護教諭の職務		4		
安全教育			2	
医学概論		2		
予防医学		2		
細菌学・免疫学		4		
寄生虫病学			2	
病理学		2		
薬理概論		2		
内科系医学概説			5	
外科系医学概説			3	
小児科学			3	
眼科学			1	
耳鼻咽喉科学			1	
歯科学			1	
理学療法			1	
小計		56	19	
教職 教育科目		教育原理	3	
		教育心理学(発達心理学を含む)	4	
	道德教育の研究	2		
	保健科教育法	3		
	教育実習	2		
	養護実習	2		
小計	16			
合計		89	21	

表2 熊本大学 教員免許取得に必要な授業科目[養護教諭]

区分	授業科目	単位	
		必修	選択
衛生学 及び 公衆衛生学	衛生学	2	
	公衆衛生学Ⅰ	2	
	公衆衛生学Ⅱ		1
	公衆衛生学Ⅲ		1
	公衆衛生学実習Ⅰ		2
	公衆衛生学実習Ⅱ		1
	予防医学	1	
学校保健	学校保健Ⅰ (小児保健を含む)	2	
	学校保健Ⅱ		1
	学校保健Ⅲ		1
	学校安全		1
養護概説	養護概説Ⅰ	2	
	養護概説Ⅱ	2	
	養護概説Ⅲ		2
健康相談 及び 活動	健康相談Ⅰ	2	
	健康相談Ⅱ		2
	健康相談活動演習		2
栄養学 (食品学 を含む)	栄養学 (食品学を含む)	2	
	栄養学実習		1
解剖学 及び 生理学	解剖学Ⅰ	2	
	解剖学Ⅱ		2
	生理学Ⅰ	2	
	生理学Ⅱ		2
	生理学実習 生化学		2
「微生物学・ 免疫学」 薬理概論	微生物学・免疫学	2	
	薬理学	2	
精神保健	精神保健学	2	
看護学 (臨床 及び 救急 を含む)	看護学概説Ⅰ	2	
	看護学概説Ⅱ		2
	看護学実習	2	
	臨床実習 学校救急処置	4	
計		35	
教職	教職に関する科目		27
	養護は教職	養護に関する科目 教職に関する科目	
養護教諭の免許取得に必要な単位数		62	

3. 健康課題と時代のニーズへの対応

以上、学校教育の中で健康教育の中核を担う養護教諭養成のカリキュラムの変遷を辿ってきた。医療的な処置や看護の能力が第一義的に期待されていた時代から、現在では医療・看護の基礎知識と技術は重視されながらも、教育者としての役割への期待が大きくなっている。カリキュラムも教授法などの技術も含めた教育に関わる科目が増加するとともに、「心の教育」、「食育」など時代のニーズに対応した健康教育の内容構成になってきている。

現在の学校教育における健康課題としては他にも「喫煙」、「性行為感染症」、「薬物乱用」、「肥満」、「生活習慣病」、「過度の痩身願望」など多種多様な問題が挙げられる。今後、健康教育を実践する上で重要なのは、まず健康課題への的確な対応意識であり、時代毎に変化する健康へのニーズを適切に把握することである。

その上で、「知識や情報の伝達が主で、実践に必ずしもつながっていない」、「科学的根拠に欠ける内容や方法がとられている」などの健康教育に対する長年の批判に十分応えられるよう、①根拠（エビデンス）に基づく内容の提供を行い、②実際の健康行動に結びつくような方法を取り入れたものに、健康教育カリキュラムの内容を高めて行く必要がある。

IV. 健康教育カリキュラムの現状分析

1. 健康関連学科の分類化

健康産業に従事・活躍する人々や健康教育の専門家などの養成はどのような状況にあるのか、大学等の健康に関連する28学科の様相を分析することで、今後の健康教育カリキュラムの課題や方向性・発展性について検討する。

まず西南日本地区として、具体的には中国・四国、九州・沖縄を設定し、その地区の健康関連学科のコース・系列、取得可能な免許・資格、特色ある講座等を抽出する。その結果を独自のフレームで分類・考察するとともに、特徴的なカリキュラムに焦点を当てて、その意義・目的や課題、健康教育カリキュラム拡大の方向性を探る。また健康教育の基盤となる授業科目の配置・構成を明らかにし、大学等における教養教育との接合という観点から、今後の新しい健康教育カリキュラムのあり方を提言していくこととする。

本研究が、九州北部での地域共同研究であることから西日本、特に中国・四国、九州・沖縄地区に限定して資料収集を行った。ここでの健康関連学科とは、最新の受験雑誌「全国短大学科内容案内」、「全国大学学科内容案内」、及び各大学・短大が開設したホームページから、「人間・心理・教育・福祉」「家政・生活」「スポーツ・健康・医療」の3項目に掲載された学科、コース・系列を、複数の研究者の合意で選出したものである。

ただし、健康教育カリキュラムの拡大の方向性を探るという観点から、学科の設置目的が規定されている国公立の学部学科を除外した。その結果、対象とした学部学科の内訳は、短期大学が9校11学科、4年制大学が16校17学科である。

次にこの28学科を、以下の5つのグループに分類した。

- ①Aグループ4学科（養護教諭の養成中心）
- ②Bグループ5学科（教科教諭等の免許取得＋養護教諭）
- ③Cグループ6学科（看護師の養成＋養護教諭）
- ④Dグループ6学科（美容師、栄養士等の資格取得）
- ⑤Eグループ7学科（その他）

分類の観点は、本研究が、健康教育を系統的に実施する場を小中高の学校教育の中に位置付けていることから、それを担う養護教諭の養成教育に焦点付けて行った。すなわち、A～Cグループは養護教諭の養成教育単独か、養護教諭と他の免許・資格取得とを並行して学ぶ学科群である。一方D,Eグループは、養護教諭以外の国家資格を取得できる、あるいは特定の免許・資格取得を目標としない健康関連学科である。

2. 特色化する健康教育

まずAグループの学科の学修内容は、養護教諭の養成教育を主としている。しかし養護教諭としての採用・就職が難しい最近の状況を鑑みて、保育や医療・介護関連の科目を取り入れたカリキュラムとなっている。これは保育所や病院事務への採用・就職が増加している実態を反映したものである。

同様にBグループの学科の学修内容では、大学4年制の比較的長い履修期間を活用しながら、養護教諭の養成を含めて、保健体育科や家庭科などの教科教育、及び幼稚園教諭・保育士など幼児教育まで、複数の教員免許の取得が可能となっている。

一方Cグループの学科での学修内容は、あくまで看護師養成に特化されている。ここでの養護教諭の養成は、保健師や助産師などと同じく、看護師の養成教育における発展的な免許の一つという位置付けである。依然として看護職に対する社会的ニードは高い。若い女性の憧憬と使命感を同時に満足させる職業として根強い人気を保っている。

以上のA～Cグループにカテゴリー化された健康関連学科では、養護教諭や看護師の養成を目的とした伝統的な健康教育カリキュラムを開講・継承してきたと言えよう。

これに対してD,Eグループは、新規の授業科目を取り入れて、カリキュラムを開設した健康関連学科が多い。例えばDグループの学科の学修内容は、スポーツ系（保健体育科の教員養成）を中心としながらも、栄養士から美容師まで総合的な健康教育を実施している。特に美容分野を健康教育に取り込むという試みが注目される。

同じくEグループの学科の学修内容では、福祉・介護ビジネス、医療・美容ビジネスを視野に入れながら、スポーツや健康への人々の興味・関心、及び行動等について、

人間の生き方や人生に関連付けて学習させようとしている。これは生涯学習社会の実現と呼応するものである。

次項では、このように発展・拡張された健康教育について、その基礎を規定する学問領域等について考察する。具体的には特色ある健康教育カリキュラムを構成する授業科目群をどのように設定するか、その内容論を検討していくものとする。

3. 健康教育カリキュラムを構成する授業科目

大学等における健康教育カリキュラムの対象を、美容分野や福祉・介護の分野まで拡大するとき、専門学校やカルチャー・センターの教育との差別化をどう図るかという問題がある。健康教育を一つの学問領域と見なすとき、健康教育カリキュラムを構成する各授業科目をどのように選択し、教育課程上にどう配列するかということである。

このような視点からまず、健康教育カリキュラムを構成する専門科目を表3の通り作成した。大学評価・学位授与機構の刊行資料に掲載された各学問分野別の専門科目一覧から、複数の研究者の合意をもって抽出したものである。専攻区分は、哲学から体育学まで14領域・18科目群に及ぶ、延べ34科目を列挙した。

特に美容分野や福祉・介護の分野まで健康教育の範囲を拡張した場合、心理学、社会福祉学、薬学・看護学、栄養学、体育学が主たる基礎研究の領域と考えられる。これらを、健康教育を支える基礎的な専門科目であるとした上に、新しい時代でのニーズを反映した実践的な実習科目群を加味して、新たな健康教育カリキュラムを再構成するのである。

美容分野への拡張に注目すると、分類の対象とした16校17学科・コース等の中から、具体的に4学科が抽出できた。さらに美容分野への全国的な進出状況を、この4学科と同様の観点で探索した結果、都市圏を中心に6学科・8コースが抽出された。そこで開講される実践的な講義・実習では、以下のような科目が例示されている。

「からだの科学」「アロマセラピー」「心理カウンセリングの理論と実践」「ビューティーサイエンス」「身体表現法」「ヘアとメイクアップ」「エステティック」「ネイル」「アロマセラピー&リフレクソロジー」「トリートメント」「ダンス」「美容法」「基礎メイクアップ」「リラクゼーション(マッサージ)」「介護予防」「若者の食育」「アニマルセラピー」「カラーセラピー」「若さを保つ料理法」「ヨーガ」等々

しかし現時点では、このような科目の履修・修得によって取得可能な国家資格が十分に開発されていない。改めて教養教育との関連で、新たな健康教育カリキュラムの構成方法を検討することとする。

表3. 健康教育の基礎となる専門科目

専攻区分	科目群	科目名
1. 哲 学	哲学の理論に関する科目	美学、芸術学
2. 心 理 学	教育・発達心理学に関する科目	情緒の発達
	人格・臨床心理学に関する科目	臨床心理学、心理療法、健康心理学、 カウンセリング論
3. 教 育 学	教育学・教育心理学に関する科目	青年心理学、教育相談学
	養護教育に関する科目	健康教育論
4. 社 会 学	社会の諸領域に関する科目	女性社会学
5. 社会福祉学	社会福祉の諸分野に関する科目	高齢者福祉論、女性福祉論
6. 科学技術研究	医学に関する科目	栄養学、健康科学
7. 薬 学	医療薬学に関する科目	医薬品安全性学、医薬品情報学
8. 看 護 学	地域看護学に関する科目	健康教育論
9. 検査技術科学	健康科学に関する科目	食生活論、健康管理学
10. 理学療法学	健康科学に関する科目	健康科学、健康管理学、 レクリエーションと余暇
11. 鍼 灸 学	健康科学・スポーツに関する科目	健康科学、健康管理学
12. 栄 養 学	栄養に関する総合的な科目	食健康論
	栄養指導・栄養教育に関する科目	健康教育論、健康指導論
13. 美 術	美術理論・美術史に関する科目	美学
14. 体 育 学	健康体力科学に関する科目	栄養学、健康管理学、 テーピング・マッサージ論
	保健体育教育に関する科目	カウンセリング論

4. 教養教育との接合

大学等における教養教育は、一般教育科目又はリベラルアーツなどと呼ばれ、高等学校の普通教科・科目を深化させた学修である。すなわち、語学、哲学・歴史、自然科学、芸術・体育などである。このような教養教育は永く大学等のもう一つの役割である職業教育と対比されてきた。例えば看護師の養成を目的とする伝統的な健康教育カリキュラムは、職業教育の典型である。

一方、新たな健康教育カリキュラムの眼目は、現代人の健康志向に対応した心身の健康美の追究である。美学など思弁哲学的なものからメイクアップ技術の取得まで広範な分野を含んでおり、教養教育と専門教育とを接合した新しい職業教育プログラムとなる可能性を秘めている。ただし、大衆化した高等教育が資格取得などの職業教育に偏りすぎたとき、教養教育は軽視される傾向にある。逆に一般教養自体が、芸能文化・プロスポーツなど、週刊誌的な情報の獲得に変質されることも危惧される。

このような風潮に対して、教養教育の意義をしっかりと方向付けようとする一つの示唆がある。教養教育を通して、人間らしいモラルの形成や倫理観のある品格の育成を行うことである。現代人の健康志向が外面的な美しさの追究に囚われすぎないように、その核となる内面的な美しさを、教養教育がしっかりと補完するという役割を果たすのである。

以上の検討を踏まえて、次項では美容分野における新たな健康教育のモデルを提示していきたい。

5. 美容系健康教育のモデル

新たな健康教育カリキュラムの一つとして、美容分野への健康教育の拡張を目的とした教育課程のあり方を提言する。これまでの考察・検討から、美容系健康教育を構成する各授業科目群とその連結部分とを構造化したものが図5である。

美容系健康教育を構成する授業科目群は、教養科目、専門科目、実技科目の3つの科目群である。まず教養科目は、専門科目を支える基礎学問系と実技科目を学ぶ学生のモラル形成を促進する情操・倫理系との2つの分野で構成されている。

次に専門科目は、実技科目の拠り所となる科学的な知識・根拠を提供する。したがって実技科目は、その基盤となる知識技術とそれを顧客に施すときのルール・マナーとの両面を学ぶこととなる。

これはカリキュラムの基底部分である教養科目、及び積み上げる専門科目と実技科目の授業内容や実施方法次第で、新たな健康教育の成否が問われることとなる。このような観点からいっそう教養教育と専門教育の充実が必要である。同時に健康産業に従事する人々や健康教育の専門家は、自分自身のより高い精神的健康とその分野を包括した学識・教養が期待されることとなる。

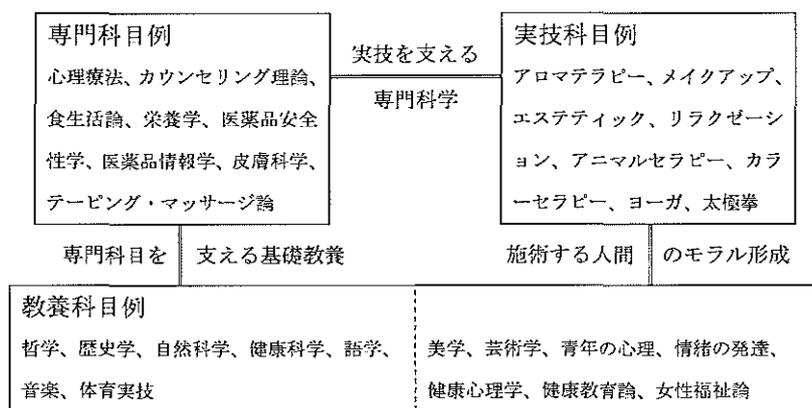


図5. 美容系健康教育を構成する科目群

V. まとめに

1. 総合的考察

本研究では、健康教育にかかわる3名の研究者がそれぞれ健康教育思想、養護教諭養成及び教育方法学の立場から、新たな健康教育カリキュラムの開発に示唆を与える、その基礎的な観点について検討したものである。

その結果、これまでは主として心とからだに関する健康問題を対象としてきたが、まず社会的な健康、次に「魂」の健康という2つの観点が追加された。具体的には「生きがい」や「まめ」というキーワードの示す健康観がイメージできる。また「美」と「善」を哲学（知）の両サイドに位置付けることで、改めて「健康美」の存在を問題提起した。

健康教育の担い手である養護教諭に注目して、その養成教育プログラムの変遷を探ったところ、近年は心とからだの関係に焦点を当てた相談活動の充実と多種多様な健康課題（性感染症、薬物、生活習慣病、やせ・拒食など）への対応が求められていることが判明した。子どもの健康課題を敏感に捉えて、適切に対処する能力の育成が期待されている。

中国・四国、九州・沖縄地区の28健康関連学科のコース・系列、免許・資格、特色ある講座等を抽出し分類した結果、新たな健康教育の取組みとして美容や福祉・介護分野への拡大を指摘することができた。それを踏まえて専門科目と教養科目、及び実技科目の関係を構造化した美容系健康教育のモデルを提言した。

2. 今後の課題

すでに健康相談は、子どもや学生の相互作用的ヘルスリテラシーの獲得を意図している。また美容系健康教育における様々な実技科目では、施術する側とされる側との相互主体的なコミュニケーション能力が発揮されている。

ただし健康美の具体像やその授業科目の内容、薬物依存や痩身願望等に関する今日的な相談事例までは提示できていない。すでに開講されている美容系健康教育4学科についても、その実施状況や評価まで言及することはできなかった。

今回の理念的、縦断的及び横断的な検討を踏まえて、次回では試験的に取り組んだ健康教育カリキュラムの実践事例を提供する。その上で既存の美容系健康教育との比較検討に取り組んでいきたい。

<注>

- 1) 大竹聡子・池崎澄江・山崎喜比古 「健康教育におけるリテラシーの概念と応用」 日本健康教育学会誌第12巻第2号総説 日本健康教育学会 2004 70～78頁

- 2) 岩永俊博 「いま、健康教育の思考枠組みの変化が求められてはいないか？」
日本健康教育学会誌第15巻第1号巻頭言 日本健康教育学会 2007 1～2
頁
- 3) 内閣官房・内閣府・文部科学省・厚生労働省・農林水産省・経済産業省編
「新健康フロンティア戦略アクションプラン I 基本的な考え方」 2007
- 4) 同上書 「II-2 女性を応援する健康プログラム (女性の健康力)」
- 5) 前掲書1)
- 6) 熊本大学30年史編集委員会 「熊本大学30年史」 熊本大学 1980 1064～
1065頁
- 7) 学校法人福原学園 「自立自助」 福原学園50周記念誌 1997 64～70頁
- 8) 熊本大学教育学部 「熊本大学大学院教育学研究科 平成20年度履修案内」
2008 74～75頁
- 9) 熊本大学教育学部 「平成20年度授業計画書」 2008 316, 335頁

<参考文献>

- (1) 吉田螢一郎 「保健科教育法」 教育出版 1982
- (2) 鈴木英男・大迫典男編 「新しい健康教育のすすめ方」 第一法規出版 1970
- (3) NHK放送世論調査所編 「日本人の健康観」 日本放送出版協会 1981
- (4) 水野忠文 「改訂体育思想史序説」 世界書院 1979
- (5) 汲田克夫 「代保健思想史序説」 医療図書出版社 1974
- (6) 「人生読本健康術」 河出書房新社 1980
- (7) 大庭茂美 「貝原益軒の健康教育思想」 東京学芸大学大学院修士学位論文
- (8) 大庭茂美 「貝原益軒の養生教育論と現代の健康論(1)」 『九州女子大学紀要
第26巻第1号』 1990
- (9) 大庭茂美 「貝原益軒の養生教育論と現代の健康論(2)」 『九州女子大学紀要
第27巻第1号』 1991
- (10) 旺文社編 「全国短大学科内容案内」 『蛍雪時代』 臨時増刊号 2008
- (11) 旺文社編 「全国大学学科内容案内」 『蛍雪時代』 臨時増刊号 2008
- (12) 上西充子編 伊藤文男・小玉小百合・川喜多喬 「大学のキャリア支援」 経
営書院 2007
- (13) 大学評価・学位授与機構 「新しい学士への途」 2008
- (14) 村上陽一郎 「やりなおし教養講座」 NTT出版 2004
- (15) 金子元久 「大学の教育力」 筑摩書房 2007

九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学 生涯学習研究センター紀要 執筆要領

生涯学習研究センターでは、論文募集を年に1回行う。論文の投稿手続の流れは、右図をご参照ください。

1、発行

九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学 生涯学習研究センター紀要として生涯学習に関連する研究成果を発表するため、年1回、3月31日を発行日とする。

2、投稿資格

本学教員及び、学外教員・研究者、姉妹校など諸外国の教員・研究者で編集委員会が特に認めた者。

3、掲載形態

招待論文・総説・研究論文・研究報告・研究ノート・資料・書評に分けて掲載する。よって著者は前もってその形態を明示する。

4、編集

1) 紀要の編集・発行のために編集委員会を設ける。

委員会は、九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学 生涯学習研究センター運営委員会並びに兼任職員から各大学が1名を選出し、委員長は生涯学習研究センター所長をもってあてる。

2) 投稿論文は査読を行うこととし、委員長が指名した査読者に対して委員長名で依頼する。

3) 編集委員会は査読結果に基づき、投稿論文の掲載の可否を決定する。

5、執筆要項

1) 原稿内容は、未刊行のものに限る。

2) その内容は、当生涯学習研究センターで学ぶ人など多くの人が理解できるように、極力専門用語を避け、平易な文章で作成する。

3) 原稿は、ワープロまたは、パソコンのワードソフトで作成した文章とする。

4) 原稿用紙は、A4判とし、横書きを原則とする。

5) 投稿原稿は、表題、本文、図表、注及び参考文献の一切を含め、A4サイズ1枚あたり38字×35行の1段組で原則として15枚以内とする。

6) 投稿原稿1枚目には、和文タイトル・著者名・所属・欧文タイトル・欧文著者名・欧文所属を掲載する。なお研究論文の場合は、その後に欧文アブストラクト(300語以内)を加える。

7) 欧文アブストラクトは、必要に応じて欧文に精通している者が点検済みのものを提出する。

8) 注は本文の末尾、参考文献の前に一括して入れ、本文中の該当箇所の右肩に1)、2)のように番号を付す。

9) 参考文献は、必要があればまとめて注の後に番号を付けて列挙する。なお注及び参考文献は、原則として、著者名、論文名、書名・雑誌名、発行所、巻数、出版年、頁の順に記す。

10) 本文見出し番号の打ち方は、次のとおりにする。なお、大きい見出しには1行あける。

I、II、III、……………

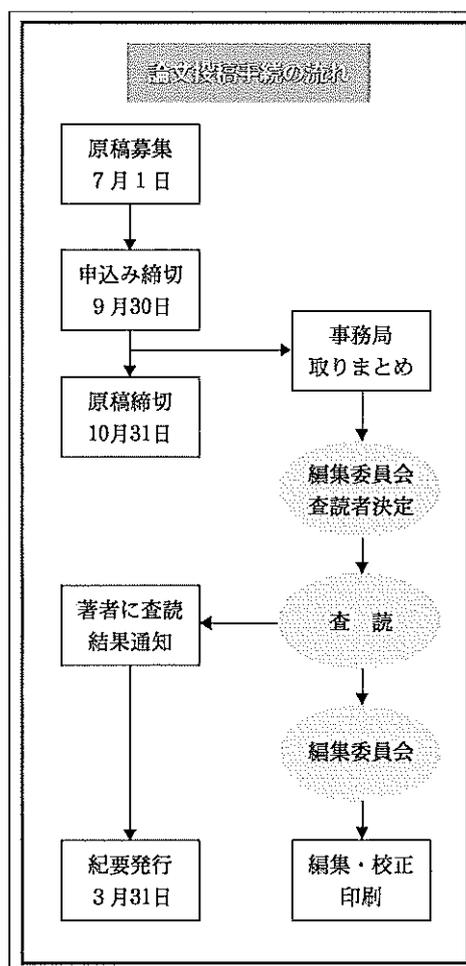
1、2、3、……………

(1)、(2)、(3)……………

①、②、③……………

a、b、c、……………

11) 投稿原稿は完成原稿とし、校正は3校を原則とする。なお、校正は必要最小限の訂正・修正にとどめ、改行、改ページにわたる修正は認めない。



執筆 者 一 覧

CONTRIBUTORS TO THIS NUMBER

阿 部 誠 文	(Masafumi ABE)	九州女子大学人間科学部人間文化学科教授 Professor, Department of Humanities, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University
馬 場 雅 典	(Masanori BABA)	九州女子大学人間科学部人間文化学科教授 Professor, Department of Humanities, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University
ダ タ ー ル ニ テ ィ ン	(Nitin DATAR)	九州女子大学人間科学部人間文化学科准教授 Associate Professor, Department of Humanities, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University
木 内 隆 生	(Ryusei KIUCHI)	福岡教育大学学校教育学部学校教育講座教授 Professor, School Education Subjects, Faculty of Education, Fukuoka University of Education
大 庭 茂 美	(Shigemi OBA)	九州女子短期大学養護教育科教授 Professor, Department of School-Nursing, Kyusyu Women's Junior College
角 田 智 恵 美	(Chiemi TSUNODA)	九州女子短期大学養護教育科講師 Lecturer, Department of School-Nursing, Kyusyu Women's Junior College

紀要編集委員会

The Bulletin of The Inter-University Lifelong Learning Research Institute Editorial Committee

委員長	平 田 トシ子	Chairman	Toshiko HIRATA
委員	山 本 和 道	Committee Members	Kazumichi YAMAMOTO
	阿 部 誠 文		Masafumi ABE
	白 瀬 浩 司		Koji SHIRASE

作成協力者

Assistants to the Editor

九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学 生涯学習研究センター職員
The Inter-University Lifelong Learning Research Institute, Staff

九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学 生涯学習研究センター紀要 第14号

平成21年3月31日印刷

平成21年3月31日発行

発行者 九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学 生涯学習研究センター

〒807-8585 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-8 TEL(093)691-6550

The Inter-University Lifelong Learning Research Institute

1-8 Jiyugaoka, Yahata Nishi-ku, Kitakyushu City, Japan 807-8585 TEL/FAX093-691-6550

印刷所 有限会社秀文社印刷 北九州市戸畑区境川2丁目3番3号